騒ぐのみで、誰一人之を諫め止める者がない、其處へヨハチ靈父は來られ、熱心に國王を諫めた所が、國王は食事係に對しての怒を靈父の身の上に遷し、命じて之を監獄の中に入れさせた。

ヨハチ靈父は斯くて數日の間獄内に閉籠められ、少しも飲食物を與へられなかつたが、甘じて其飢餓と苦痛とを忍んで居つた。數日の後一人の侍從が此獄に訪ね來て、國王は一時の怒に任せて靈父に無禮を加へたが、今日にては之を深く悔い、予を遣はして其罪の赦しを乞ひ、共に宮殿に歸らんことを望まるゝと述べたので、靈父は之に從うて宮殿に歸ると、國王は厚く之を欵待して後、別室に靈父を伴ひ入れ、復び皇后の不正なる事を說き、如何にしても之が疑惑を晴らすことが出來ないから、何卒告解の祕密を漏らしては呉れまいか、朕は決して之を他言せぬ。そして若し其賞として何かを望むならば遠慮なく注文せよ、必ず其願の如くせん！と。靈父復奏して云ふ「陛下、臣に他の事を命ぜらるゝならば喜んで心を盡し力を致すべし、されど此事のみは能はず、臣天主の司祭なれば、亦當に力を竭して天主の御誡を守らねばならず、告解を聽くも直に之を聞かざるが如くにして、決して之を彰すことが出來ず、縱令死に處せらるゝも只緘默して語るを得ず」と。

國王は勃然として大に怒り、直に近衞兵士、數人を呼び、斯々せよと命じた。兵士等靈父を室外に連出し強く縛つて交々刑罰を加へ、其間絶えず國王の命に從ふや否やを聞糺して居つたが、靈父は惟耶蘇マリアの聖名を呼ぶのみにて、他に何事も言はない。乃で復た強き繩を以て散々に打擲し、尙鐵を紅く燒きて其肋旁を燒いて居つたが、國王の使者が來て、一先づ放免せよとの事であつたから、靈父を其儘にして兵士等引取つた。靈父は此等の事を少しも怨まず、身の傷が治つて後、平常の如く立派に任務を果して居つた、が國王の心事を能く知つて居るので、心密かに殉教の覺悟を

聖ヨハチ、チボムセノ殉教

（死體を河中より見出されて葬らるゝ所）

して居られた。

耶蘇御昇天の祝日後、ヨハネ聖父は聖堂に於て說教せられたが、其時ヨハネ聖福音書(一六ノ六)にある。「暫くにして汝等最早我を見ざるべく云々」といふ主の聖言を藉つて、先づ自分は久しからずして必ず義の爲に死す事を說き、繼で將來異端が四方に起つて公敎會と國家とを亂し、身靈共に損害を蒙る信者が無數にあるべしといふ豫言を爲し、雙眼に涙を湛へて人々に別辭を告げた。

其夜國王は復も聖人を召し、皇后の告解を語れさもなくば死に處すと、聖人は平和の眼眸を以て國土を視つめたまゝ一言も出さなかつた。國王は狂氣の如くに甚く怒り罵り、やがて近衞兵を呼び、低聲に命を含めた。兵士等直に聖父を捕へ、夜の更くるを待つて市中の橋の上に送り、其手脚を縛つたまゝ河中に投入れた。見ると奇妙にも星の如き火の球が無數に水面に浮び、聖人の身に附纏ひつゝ流れに隨うて行くので、兵士等は素より、何時ともなく集つた群衆は、唯アレヨ〳〵と叫びながら河岸に立つて看て居る。うして兵士が述べた詳しい事情は、早くも市中一般に知れ渡つたので、人々は皆ヨハネ聖父の慘死を惜み、惡王の暴虐を呪ひ罵つて居つた。

そのうちに人々は火の球に隨ひ、河に沿うて行くと、少頃して其火が對岸に停つたので、駈け附け見ると聖父の屍體が浮上つて居る。それで翌日其屍體を市中の大聖堂に入れ、司敎も信者も市民も喪を送り、祈禱の後立派な葬儀が行はれた。そして其時數人の病者が、其聖屍に觸れて全癒した。時に降生後千三百八十三年であつた。

墓前に於ても許多の奇蹟が行はれた。其後此國王は心中不安に充たされ、數年の後國を失ひ位を喪ひ、終に敢なき最後を遂げたといふ。

(此聖人の祝日は十六日に當るのである)

＊　＊　＊　＊　＊

默想

カルメル聖衣會　(三)

さて天主は恩惠を世に施すや、一人でも多く其恩惠に浴せんことを望まれ、聖母マリアも亦聖シモン、ストックに聖衣を與へ、以て之を着ける者には地獄の苦罰を免かれしめ、此大恩を世人に通ぜしめんと望まれたのである。乃で聖シモンは、聖母の此聖慮を天下に普く告げんと、聖母聖衣會を立てゝ信者等に勸めて之に入らしめ、會員をして聖母より賜ひし所の聖衣に似たものを一枚づゝ戴かせ、特に聖母に事ふるの志を表はさせたのであるが、之に從ふ者は必ず聖母の保護を得て、地獄の苦患を免かれ易くなり、各國の男女老幼は爭うて此會に入り、皆其聖衣の表號を普通服の下につけるやうになつた。

それより約ち七十年の後、聖母マリアはまたヨハチ第二十二世敎皇に顯はれて、カルメル聖衣會を保護すべきことを命じ、會員をして死後一週間内に、特に練獄より救ひ出すべき旨の御告げがあつて以來、此會に入る者益々多く、代々の敎皇陛下も亦此會員に數多の贖宥を施さるゝ事となつた。

此聖衣は俗に肩衣とも又旗とも稱せられ、會の創立當時修士信者の用ひて居つたものは、大きく寬やかな衣であつたが、時代の移ると共に漸々小さきものに改まり、今日では小さき旗形の布二個を、細き二條の紐の兩端に附け、其一を胸に、他を背に垂れて置くのである。そして其布の色は大抵黑色、樺色、鼠色、紅色を用ひ、其形の大小、紐の種類は隨意である。尙熱帶地方に於ては其布が早く腐蝕するの虞れがあるので、千九百九年に、現敎皇の特別の許可により、アフリカのコンゴー國に於て、布の聖衣の代りに特別のメダイを用ゆることを許されてから、漸々他國にも許され、我邦に於ても既に一昨年頃から之を用ゆるやうになつて居る。

信者にして此聖衣會に入らんとするには、其旨を此權を有つて居る靈父に願ひ出る。スルと靈父は聖衣を祝福して其者に與へ、其人の姓名靈名を會員簿に記載し、之をカルメル會に報告するので、千八百八十七年羅馬の禮部聖省の規定に據れば、聖衣會に入るも、其姓名と靈名をカルメル會の名簿に登錄せざる者は、之に附隨する贖宥を領くべからずと。

そして入會後聖母の特別の保護を受け、地獄を免かれんとせば、第一肩衣にせよメダイにせよ、聖母の忠僕たる印なれば、日夜之を離さず身に帶び、若し之を新しきものと取換ゆる際には、必ず靈父の祝福を求めねばならぬ。第二特に聖母を尊敬して之に依靠ること、第三私慾を制へ規誡を守り、罪惡を避くべく、第四臨終の際は特に此聖衣を離さざるやうにせねばならぬ。又聖母に依縋つて煉獄の救ひを求めんとせば、入會後臨終の時に至るまで絕ゑず聖衣を身に帶び、罪を避け誡律を守るの外、常に其心情を淨くして邪淫の念を燃やさぬやうにせねばならぬ。そして書を讀み得る者は毎日聖母に對しての祈禱を誦へ、讀む能はざる者は、聖會の定むる各大齋の外、毎水曜と土曜とに小齋を爲すべく、若し大小齋を守る能はざる者は、聽罪靈父の意見を伺ひ、他の善功を爲さねばならぬ。

要するに此聖衣は、世の所謂守札等とは全く其趣が異つて居るので、例へば神道佛敎の信者が、胸に腰に守札なるものを附けて、其身体の健全を與へられるものとし、自ら惡しき行爲をなすも、其罪を悔い改むることなく、單だ斯くすれば守護を蒙るものとのみ思うて居るが、カルメル聖衣會の會員となり、聖衣或はメダイを持つ者にして、若其信仰、其素行を等閑にするならば、會員となることの無益なるのみならず、甚しく聖母に對して侮辱妄信の罪を犯す者と云はねばならぬ。されば我等は聖衣會の本領を明かにし、力を竭し心を盡して聖母の忠僕となり、世に於ては容易く惡魔の誘惑を防ざ、罪を避くるを得、死しては必ず地獄

の苦罰を免がれ、若し獄に止まるも、聖母は必ず一日も早く之を救うて天國に昇らしめ給ふことを信じ、厚き感謝と共に忠勤を勵むやうに心懸けねばならぬ。

（未完）

五月廿二日 (1)（降生後一四五六年死）

後花園天皇時代

聖女リタ寡婦

聖女リタは伊太利國の人で、幼き時より童貞を守らんと望んで居つたが、父母の准許を得ることが出來ず、己を得ず十六歳の春某の妻となつた。此良人といふのは性來放縱で、地方の人々に畏れ嫌はれて居る人であつたが、リタは之を憂ひ力を竭して改心を勸め、漸漸善心に立歸つて居つた。が後終に仇人の爲に害せられ、不歸の客となつた。二人の遺兒は之が復讐を爲さんと機を窺うて居つたが、母親のリタは人を愛し敵をも赦する道を懇ろに說き聞かせ、終に之を思ひ止まらせた。が間もなく兄弟とも病氣に罹り、臨終の祕蹟を傾けて善き最後を遂げた。

聖女リタは、夫に離れ二人の愛兒に別れ、不幸の孤寡となつたが、己が不運を怨まず、將來世間を避けて修道に身を委ねんと欲し、オグスチノ會の某童貞院に入らんとした。が其修院長は、此院は「寡婦を容れることが出來ないから、去つて他の修院に行かれよ」と斷つた。リタは何處に往つて宜いか分らないので、日夜憂ひ愁み、只管主に祈つて其默示を願うて居つた。

一夜此修院の童貞女等は堅く門を閉ぢ、常の如く眠に就いた。リタも亦我家で例の如く熱心に祈つて居つた所が、忽ち其處へ聖ヨハチ、聖オグスチノが顯はれて慰めつゝ「汝求むる所の望みは天主に聽容れられた」との御告げを受け、全時に主の全能の恩寵を蒙つて、リタは路を歩まず、浮雲の如くに空中より其修院に行き、門戸を開かずして或一室に入つた。翌朝童貞女は早くも之を見て大に駭き怪み、其故を問ふので、リタは詳しく實際の事を物語ると、修院長も此人の功德の優れて居ることを明かに知り、特に之を修院に容れることを准した。

リタは修道女となつてよりは、一層身を慎み德を行ひ、努めて代々の聖女の德行を敬うて居つた。ろして堅く修院の戒律を守り、最も賤しき粉に服し、食事は只毎日パンと淸水とを用ひて一食を取つて居つた。また主の恩寵を蒙つて肉慾に打克ち、心を亂さずして永く祈禱默想を爲し、毎夜十二時に起き、夜の明くるまで吾主の御苦難を默想して、兩眼に泉の如く涙を流して居つた。

一日主耶蘇御受難の說敎を聽き、心に異常の感動を覺えたので、自分の室に歸つて深く默想し、我身に其御苦痛の一分を分け與へ給へと祈つて居つた。所が忽ち甚く頭痛がし、丁度茨の刺にて深く骨を刺さるゝ思ひがした。が其後頭上に一の瘡が出來、絕えず血が流れ出で、其疼痛が劇しく、長上の命に從ひ藥を用ひても効果がなかつた。然しリタは之を吾主より賜ひし茨の冠の如くに見做し、喜び甘んじて其疼痛を忍んで居つた。

某年敎皇は各國に諭旨を下して、信者等に勸め「羅馬に來て使徒等の墳墓を敬ふ者には、全贖宥を與ふ」と。由つて此修院長も修道女等一同を羅馬に往かしめやうとし、只リタのみは頭瘡の苦痛の故を以て修院に留れよと命じた。リタは是非共往つて此大恩を獲やうと望み、夜もすがら天主に其御恩を願うて居つたが、翌日奇妙にも其頭瘡が全く癒え、終に修道女等と相伴うて羅馬に行き、全贖宥を領けて歸ることが出來た。が歸つて後幾もなく其頭瘡が復た現はれ、以前よりも甚くなつた、然しリタは相變らず其痛苦を忍び、恰も其を感せぬ如くに見ゐて居つた。

聖女リタは斯く度々主の大恩を蒙け、功德益々輝き、奇蹟をも行ふやうになつたが、其謙遜、卑下、苦業も亦普通の者の到底及ぶ事の出來ない程であつた。其奇

蹟も數多あるが、其一を擧ぐれば、一日親戚の某婦人が訪ね來て話の末、リタに向ひ、「貴女の頭瘡の疼痛はさぞ酷いでせうが、其疼痛を止める爲に何か好い物はありませんか、何でも仰有れば持つて參ります」と云ふと、聖女は微笑みながら、「それでは何卒無花果の實と、玫瑰の花とを持つて來て下さい」と賴んだ。時が丁度一月の中浣であつたから、其婦人は之を戯言と思ひ、「今時其樣な物を、何地を探しても有りますまい」と答へながら別れ歸つたが、其日家に歸つて何心なく庭園に下りて見ると、奇妙にも玫瑰の花が咲き、無花果の實が結んで居るので、今更の如く聖女の聖德高きを感嘆し、直に其花と實を持て修院に行つたといふ。

聖女リタは身を終るまで、總ての苦痛を忍んで居つたが、竟に重き病を患ひ、最後の祕蹟を傾けて後修院長の祝福を求め、小さな十字架を手に執つて胸に抱き、最も守らかに其靈魂を天主の御手に委ねた。時に降生後千四百五十六年五月廿二日であつた。死後其顏容は急に美しき幼女の如くに變り、頭瘡も急に癒ゑて其痕は光り輝いて居つた。

市中の人々は皆集り來て送葬した。其墓前に於ても許多の奇蹟が行はれ、特に痘瘡を病む者にして聖女の轉達を願ひ、全癒を得し者は今日に至るまで絶ゑずといふ。

五月廿二日（2）（第十七世紀）

後水尾天皇時代

福者ヨハチ、バプチスタ、マチアド靈父

福者被昇天のペトロ靈父

並に日本人の殉教

福者ヨハチ、バプチスタ、マチアド靈父は、葡萄牙國の華族の子で、テルセイラ島の都なるアングラといふ所に生れた。十一歲の時日本廿六聖人の殉教の話を聞いて大に感じ、自分も日本に行つて彼等の如く殉教したいと人々に語つて居つたさうであるが、是が豫言の如くになり、十六歲の時、イエズス會に入つて修學し、千六百一年印度に航り、コアに於て哲學、マカオに於て神學を研究し、業了へて千六百九年則ち我慶長十四年、遂に日本に渡航せられたのである。

當時は大阪陣の以前とて、人心何となく穩かならず、動もすれば爭鬪を起して殺戮を事とせんとする上、所謂切支丹の嚆矢しき折柄であつたから、京都伏見の間に布教して居つたマチアド靈父は、一時長崎へ退き非常の熱心を以て祈禱苦業を爲し、布教の爲に働いて居られたが、德川家康の嚴命に依り、宣教師は悉く日本を放逐せらるゝ事となつた。然し靈父は窃かに信者の家に匿れ、他の宣教師が日本を去つた後島原に赴つた。後慶長十九年十一月佐兵衛なる者が、有馬の口の津に於て信者を殺して居る時、靈父は小舟に乘つて丁度其海岸を通り合せ、熱心に其殉教の樣を見て、自分も直に上陸せんとしたが、舟人に引止められて、志を果さなかつた。

後長崎に行つて山中の洞穴に陰れ、千辛萬苦を嘗めて晝夜布教の爲に奔走し、專ら大村、五島地方を巡廻して居られたが、人々は靈父の熱信と德行に感じ、聖人と呼んで深く尊敬し、洗禮を領けんと望む者日に月に增し、一村殘らず信者となつた所もあつた。乃で元和三年になつて大村の領主純賴なる者が、將軍家康の命を奉じて靈父を捕へんと、數多の捕人を遣はして諸方を探索させたが見當らず、其後四郎兵衛と云ふ背教者に探させたが、之亦尋ね得ないので、今度は大勢の探偵を各地に派遣し、百端の工夫を以て嚴重に探靈した結果、圖らず他の一人の靈父を捕縛した。

是はフランシスコ會の靈父にて、其名を被昇天のペトロと云ひ、西班牙國トレド市の人で、千六百八年則ち慶長十三年日本に渡來せられ、暫く身を潛めて居られ、遂に長崎にある仝會の修院長となつて布教の事務を司り、絶ゑず附近の信者を慰め勵まして居られたが、背教者なる長江の奉行が僞つて後悔の色を表はし、告

解に口托けて不意に之を捕へんとしたるも、靈父は疾く之を悟つて長崎より四里ばかり距つた諫早領の木々津と云ふ村に行かれたのを、奉行が追駈け行つて之を捕へ、領主が新に建てた監獄に入れた。

ペトロ靈父は獄中に在つて絶ゑず十字架を抱き、「嗚呼救主、罪人なる我は如何にして主の爲に四人となるの幸福を得たりしぞ、我會祖フランシスコ、ザベリオも熱心に之を望み居たりしに」と云ひ、十字架の裏にある聖母の像を眺めては、其轉達を乞ひつゝ自ら慰めて居つた。其時長崎の長上なるアポリナリス、ブランコ靈父に贈つた文に、

耶蘇マリアの聖名によつて閣下の安全を希ふ。我は福音を宣べ傳へし爲に、今大村領の獄舎に四人となり、昔し我等の爲に命を捨て給ひし御主に、命を捧げ奉らんと其日出度日を待ち居れり。幸に諸兄及各修道者信者等によろしく傳へられよ。我は數多の兵卒に看護せられ、人に面會することも、手紙の往復も出來ず、普通囚徒の食する物以外に食すべきものなし。然し斯く嚴重なれども、天主は我を棄て給はざる証據には、食物を運ぶ女が自ら信者なる事を我に告げ、食物を容れて椀の中に手紙を入れ置けば、翌日名宛の所へ送らんと約せし次第にて、閣下も此女の手より我に返詞を贈り給へ、尚又此女の手を經て頒撒の祭服を窃に贈り給はんことを希ふ云々。

此手紙が長上の許に達したので、長上は直樣返書と祭服とを彼の婦人に渡して深く其親切を謝し、尚此上一層の注意とを依頼したから、婦人は獄舎に歸つて返書と祭服とを靈父に渡し、其後食物を始め萬事に深く心を用ひて大に靈父を慰めて居つた。靈父は日ならず再び一通の書翰を長上の許へ贈つた。

……閣下我長上として我を慰め、父として我を豊かならしめんとせらるゝにより、願くは天主其厚意に報い給はん事を、我慰藉に就ては全く安心せられたし、我は世に比なく慰められつゝある者にして、晝は早く過去り、夜も天主が斯る虫螻に等しき者を惠み給ふ御恩を感謝するに時間たらざるが如し、願くは祈禱を以て我を援け、天使及び他の人々にも我が爲に祈禱を願ひ賜はれ、食物の事も安心せられよ、今の食物充分にて、飯も汁も餘りあり、其上我は獣肉魚類雞卵の三品を禁じ、葡萄酒をも飲まざる事に決心して居る、願くは我が爲に聖寵を賜はらんことを求められんことを。

千六百十七年四月十八日　　被昇天のペトロ

其後十二日を經た四月廿九日の夜半に、役人等獄舎の戸を開いたから、靈父は愈明日死刑に處せられるのであらうと思ひ、首を回らして見ると、數多の役人がイエズス會のヨハチ、バプチスタ、マチアド靈父を引立てゝ此舎に押入れたのである。此時ペトロ靈父は我にもあらず走り寄つたが、互に涙を催して良久言葉も出なかつた。

此マチアド靈父は、前にも逃べた如く數多の探偵に搜索されて居つたが、小兒までが其在所を隱して探偵の苦心を空しからしめて居つた。然るに靈父は長上の命を受けて長崎を出で、大村平戸の各地に巡廻して信者を慰め、進んで五島に航らんとした時、信者等は深く之を諫め、近時探偵嚴重なれば旅行は甚だ危し、一旦長崎へ還り暫く潜伏せられよと、頻に引留めたが靈父は長上の命に從はんとて強て出發し、鹿の子と云ふ村に行き、信者の告解を聽き、ミサ聖祭を小屋の内で行うて居つた所が、不意に役人等が亂れ入つて之を捕縛せんとした。靈父は少しも驚き騒がず、役人に向ひ「此聖祭を終るまで待たれよ、汝等天主に背きて此上もなき罪を犯す者であるが、我は汝等を責めず、却て汝等の爲にも領主の爲にも天主に願ひ、其罪を赦されんことを望む旨を告げ、數多の役人等も其周圍を取卷きながら聖祭の終るを待つて靈父を捕へたが、風吹き波荒くして舟を出す事が出來ず、數日滯留して愈々艀出をなす場合、靈父は縛られんことを望まれしも、役人

等憚つて之を辭し、我等が斯く靈父を護送するは領主の命に從ふ爲なりと云ひ、厚く尊敬の意を表して船に乘つた。其時神學生のレオと云ふ青年が、靈父と運命を共にせんと願うて離れず、船は四月廿九日の夜中大村に着したので、役人は數多の提灯を照らして靈父を獄舍に入れ、レオを一夜野宿させて其翌日仝じ獄舍に入れたのである。斯く異なる修道會の布教者が期せずして仝じ時に天主の爲に捕へられ、仝じ獄舍に繫がるやうになつたのは、誠に感謝すべき事である。

マチアド靈父は直に其事情を長上の許に通知し、尙自分は四十日前より持病の爲に甚く苦んで居るが、然し之も主の攝理なれば我罪の償として喜んで忍んで居る旨をも書添へた。そして其後再び長上に手紙を送つて、

我等の看守を司る奉行は、其父ミカエルと云ふ者よりの望によつて種々の便利を與へ呉れ、特に我等の願を容れて彌撒を行ふことを許し、尙司祭の勤めに係る事は一切自由に許すべしと番卒に命じたり。併し誰人も此舍に出入するを許さず、我等は今日聖靈降臨の祝日にて彌撒を行ひしが、天主の聖寵によつて此後も毎日聖祭を献げ得るは感謝に堪へず、尤も人と談話する事は堅く禁じられあるも、工夫を回らして信者の告解を聽き得るばかりでなく、幸にも我は今日一人の小兒に洗禮を授け、ペトロ靈父も亦他の一人に洗禮を授けられた。我等は唯惡魔が力を竭して我等に敵對すれば、我等も亦天主の慈悲に靠り生命のあらん限り飽までも之と戰はん云々。

と、其後大村の領主は使を江戸に送つて裁決を請ふた所が、將軍は早速死刑に處せよと命じた。領主は之を聞きて其準備をして居つたが、二人の靈父とも默示によつて最早死期の近づきしを知り、益々熱心に其覺悟をして居られた。

五月廿二日死刑の宣告を傳ふる爲め、奉行友永四郎兵衞が獄舍に入り來たが、自ら憚つて死刑の言渡しを

言ひ兼ね、他の話をなし二度まで靈父の前を退いたが、斯くては果てじと意を決し、三度目に漸く其旨を傳へると、マチアド靈父は大に喜び、我は生涯に最も喜ばしき日三日あり、即ちイエズス會に入りし日と、主耶蘇の爲に捕縛されし日と、死刑の宣告を受けし今日と是なり、此上は生ながら試し斬に爲られんことを望むと述べられ、ペトロ靈父と共に思謝の歌を謳ひ、嬉し涙を流しつゝ各自鞭の勤を爲し、互に告白をなして後、各々書翰を認めて長上の許に贈つた。今マチアド靈父がウビエヲ師に贈つた文意を記すと、

唯今我等は主耶蘇の爲に生命を捧ぐべしとの告を得たので喜んで我身を犧牲に供ふるのみならず、若し千の生命があれば千度此幸福を得んと欲する者である。我は惡人なれども、日本人に眞の教を傳へ、道の爲に死する身なれば、滿足して此世を去らん。然し今日迄で怠慢に由つてこの洪恩に當るべき功績なき事を虞るゝも、主の御憐憫とイエズス會々員の通功とによつて、許されん日を待つのみ、今主の爲に殉教せんとす、願くは聖祭の際我等の爲に祈られんことを、死刑の役人を待たせ置きて此最後の書翰を認む。

千六百十七年五月廿二日

ヨハネ　パプチスタ、マチアド

此書翰は教會に於て、聖人の遺物として保存されてある。斯くて友永四郎兵衞は賄方に命じ、種々の食物を出させ、是が此世の名殘なれば心靜かに食し給へと勸めたが兩靈父は之を辭し、厚意の程は有がたいが、我々は最早此世の食物を望まず、只天國に於て終りなき糧を望む者である。疾く刑場に送られよと促しつゝ身を起され、軈て獄卒が來ていざと監獄の戸を開くとペトロ靈父は手に十字架を握り、鞭撻の道具とフランシスコ會の戒律書とを携へ、マチアド靈父は十字架と祈禱書とを持ち、俱に靜かに歩み出られた。

是より刑場に至る道筋十町餘の間は、兩靈父とも

歩みながら絶ゑず説教を爲られ『我父は今に至るまで働き給へば、我も働くなり』との主の聖言の如くにして刑場に着いた。がペトロ靈父は尚も説教をして居られるので、マチアド靈父は之を制め、「最早殉教の時刻なれば覺悟せられよ」と云はれたので、漸く説教を止て別れの辭を述べられた。其時獄卒の一人にしてダミアノといふ信者は筵を携へ來て、此上に坐し給へと勧めると、マチアド靈父は厚く之を謝しながら、我等の體は土となるべきものなれば、土の上に坐りて宜きにと云はれた。此時一人の役人は早くも後に廻り、氷の如き刃を以てペトロ靈父の首を唯一打に斬落し、返す刀にてマチアド靈父の首を發矢と斬込んだが、如何した狂ひか血が迸ったばかりで頭が落ちないので、再び氣を焦つて打つたが仝じく斬果さず、終に三度目にして漸く斬落した。曩に靈父が、我を試し斬に爲られんことを望むと云はれし詞に偶然にも符合したのは實に奇妙であつた。

見物の中より大勢の男女老若がバラ〳〵と刑場に押入つて、紅の血に染みし衣服や土砂を、遺物として拾ひ持歸り、屍骸は少し隔てゝ仝じ穴に埋められたが、其後この穴の上に毎夜二個の星が降るとの風説が盛んとなり、漸次に洗禮を望む人が多くなつた。彼の有名な信者バルトロメオ大村純忠の孫にて、當時の領主たる大村民部純賴も心を改め、信者とならうとしたが、卑怯にも將軍家康の壓制に抗し得ずして洗禮を授からなかつたのみならず、奉行友永四郎兵衛は熱心なる信者となり、異教人を改心させ、背教人を立歸らしめんが爲に大に力を竭して居つたのを、佛僧が深く之を憎み、領主に之を告げて若し之を捨置けは將軍へ直訴せんと頻に迫つたので、領主純賴は止み得ず家來中藏に命じ、十一月四日の土曜日に友永四郎兵衛を斬罪に處し、尚領分の信者に恐怖の念を懷かせんとて、友永は禁制の宗教を奉じたる故斬罪に處したる旨を布告したのである。然し之が爲め一人も恐怖の念を起す者なく、却て公教の爲に生命を棄てんと望み、公然天主の教を説く者もあつて、益々盛大となつた。

時に新に洗禮を領けし信者ヨハネ仁右衛門といふ人は、特に熱心の信仰を有ち、深く殉教を望んで遂に其恩惠を得たのである。此人は攝津の產れで、佛教信者であつたから、初め切支丹を憎み、惡口雜言を吐いて居つたが、マチアド、ペトロ兩靈父の殉教を見て大に感動し、佛教の非を悟つて長崎に居られた日本の司祭トマス荒木師に就て公教の主意を聞き、遂に洗禮を授つた。そして後其頃大村の監獄に繫がれて居つたズマラ靈父、フランコ靈父の二人を訪ひ、密に祕蹟を領けて居つたが、佛僧等は之を聞いて大に怒り、昔時フワリゼオ人が聖ポーロ使徒を誹り「彼はエルザレムに於て耶蘇の徒弟を責めし者ならずや」と云ひし如く仁右衛門を嘲り、終に奉行をして捕縛せしめたのであるが、仁右衛門は大に喜び、十二月廿五日御主御降誕の祝日に當つて刑場に送られ、刀の裏にて三度まで打たれ、試切にして寸斷せられ、芽出度天國に昇られたのである。其時も領主純賴は仁右衛門を辱しむる爲め、此者の死刑は切支丹を奉するが故のみではなく、前の借金の爲に種々惡事を爲せし故なりと觸れ示した。が斯の如き事があつて以來、日に月に信者の數が增し、遂に領主の勢力を挫くやうになつた。是れ皆マチアド、ペトロ兩靈父が殉教の功績であるから、世界の公教信者は深く之を尊敬し、毎年五月廿二日を以て祭典を執行して居る。我日本の信者たる者は、特に之を尊敬し、彼等に其轉達を乞ふやうにせねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

カルメル聖衣會（四）

茲に聖衣會に附隨せる贖宥を記せば、

一、全贖宥を得る法

一、聖衣會に入りし當日告解を爲し聖體を領け、教

皇の聖意に由つて、天使祝詞五遍を誦ふべし。

一、カルメル山の聖母の紀念の祝日、即ち七月十六日告解を爲し聖體を領け、前の如く天使祝詞五遍を誦ふべし。

一、右祝日後の次の日曜日告解を爲し聖體を領け、前の如く祈禱を誦ふべし。

一、臨終の時、告解を爲し、聖體を領け、祈禱を誦ふる外、主耶蘇の聖名を唱ふべし。

一、毎月第一の日曜日、告解を爲し、聖體を領け、祈禱を誦ふる外、復び聖堂に入つて祈禱を爲すべし、若し病氣或は旅行中にして聖堂に行く能はざる者はコンタツ一串を繰るべし。

一、既に死せし會員を助くる爲に彌撒を願ふならば其都度彼等に代つて全贖宥を贏け遣る事となる。

二、分贖宥を得る法

一、毎月一回祕蹟を領け、前の如き祈禱を誦へるならば五ヶ年半の贖宥を得べし。

一、靈父病人に聖體を授くる時、手に蠟燭を執り、靈父に陪隨うて病人の許に赴き祈禱を誦ふるならば、仝じく五ヶ年半の贖宥を得。

一、聖母の祝日に遇ふ毎に、祕蹟を領け、天使祝詞を五遍誦ふれば、三ヶ年の贖宥を得。

一、葬式を送り、貧窮を矜み、仇人と和合し、善道を以て人を導き訓ゆる等の善功を爲す毎に百日の贖宥を得。

以上の各贖宥は、之を煉獄の靈魂に讓り與ふ事が出來る。

之に由つて見れば、世界のカルメル會々員が行ふ所の善、積む所の功勞は、大非なき會員が其霑ひを得、尙世界各國のカルメル會の修院に在る數多の聖人聖女と通功し、其恩寵を分ち得るといふ事は、實に大なる益にして、之を望まざるを得ないでわらう。

現今カルメル山には、ユリアが昔日隱れ居たりし所に一大修院が建てられあり、熱心なる修道者が此院に住居して、代々の聖人の志を繼ぎ、天主を敬ひ特に聖母を愛して居る。されば此山は三千年來人の聲を借つて救世主の母を讃美し、尙世の窮末に至るまで其聲が絕ないでわらう。

要するにカルメル聖母聖衣會には許多の大恩があるのであるから、會員たる者は心を竭して祈禱善業を爲し、尙教會の聖慮を体して定められし功績を積み、以て上は聖母を悅ばせ奉り、下他人と自己の靈魂とを救ふやうに心懸けねばならぬ。（完）

五月廿三日（一世紀）

垂仁天皇時代

聖女プデンシアナ童貞
聖女プラクセデス童貞　姉妹

使徒聖ペトロが羅馬に於て聖教を弘め傳へて居つた時、參議官にプデンスといふ者があつて、妻のサビナと共に富裕に暮し、長子ノバト、次子チモテオ、長女プデンシアナ、妹をプラクセデスといふ四人の子女を有つて居つた。某年此父母子女並に僕婢等數百人、聖ペトロに從うて教理を學んだが、其後此一家は聖ペトロを深く愛慕して、己が邸の中に住はせ、尙家屋の一部を改造して聖堂となしたので、信者等毎日此處に來て聖祭に與り、祕蹟を領けて居つた。

其時代羅馬の風習として、市中の貧民は各自一の富豪を擇び、毎日晨早くより此家に出入して主人の安否を伺ひ、終つて衣食の施與を乞うて居つた。プデンスは富豪であつたので、毎日其保護を仰ぐ者が多く、自然數多の人々が此家に出入するので、信者等も誰憚からず此家に集つて居つた。師の聖ペトロが殉教した時、プデンスの一家は殊に之を憂ひ悲んだが、然し業に安んじて之を外に表はさなかつた。

プデンス夫妻が世を去つて後、子女等其善業を倣ひ、殊にプデンシアナとプラクセデスの姉妹は、信者が追

害に遭ひ、監獄に入れられ刑罰を受けて居るといふ事を聞くと、即時人を遣つて必要の衣食を給し、時には姉妹共危險をも顧みずして自ら監獄に入り、人々を慰め、或は藥を施し繃帶を取換へなどして居つた。そして信者にして殉教する者があれば、姉妹は家僕を遣はして兵士等に賄賂を送り、其死體を貰ひ受けて之を葬つて居つた。

又邸宅の中に一の井戸を堀り、家僕等を裁判所或は刑場内に遣はして、殉教せし聖人の血を取つて歸らしめ、之を右の井戸の中に入れさせて居つた。斯くの如く數年の間熱心に聖教の爲に働いて居つたが、姉のプデンシアナは病氣に罹つて五月十九日立派な最後を遂げ、四年の後妹のプラクセデスも、迫害が益々嚴しく、信者の苦難を見るに忍びず、此果敢なき塵の世を早く避けしめ給へと祈つて居つたが、遂に七月廿一日病氣なくして世を逝られた。其年號が明かでない。

數年の後敎皇第一世ピオ陛下は、此プデンスの邸宅全部を聖堂に改めて、之をプデンシアナの聖堂と名づけ、數百歩を距てゝ又一の聖堂を造り、之をプラクセデスの聖堂と稱し、代々修理を施して今に存して居る。そして其庭園には昔日主耶蘇が鞭うたるゝ爲に縛られた石の柱が樹てられ、尙聖女等が昔時殉教聖人の聖き血を入れた井戸も立派に保存されてある。

（因に此聖女等の祝日は各自逝去せられた日（即ちプデンシアナ五月十九日、プラクセデス七月二十一日）である）。

＊　＊　＊　＊　＊

默　想

火の竈より救はれし三少年の故事（一）

舊約聖書に據れば、往古バビロンの王ナブコドノゾルは、屢々四方を改めて勝利を得たので自然傲慢となり、竟には高さ十餘丈の黃金の偶像を作らせ、之をバビロンの近傍なるトナの地に建て、「何月何日、新に作つた金像の前に集合し、恭しく之を拜禮せよ、若し之に從はざる者があれば、火竈の中に投入れて焚殺さん」といふ命旨を全國の有司に傳へ、之を一般の者に告げさせた。そして當日になると、文武の有司が全國より集り來て其式に與り、笛の音鼓の響の間に、皆交る交る其像の前に平伏して恭しく之に禮拜し、數多の人民も亦有司に隨うて其處に跪きつゝ禮拜して居つた。

時にイスラエルの民が虜となつてカルデアに居つたが、其中のアナニアス、アザリアス、ミザエルといふ三人の少年は、特に王の寵愛を受け、厚く欵待されて居つた。然し熱心に天主を信じ之に仕へ、決して異端に從はず、また邪神をも敬はなかつたのである。それで此日も他の人衆は皆、或は平伏し、或は跪きつゝ金像に拜禮して居つたが、此三少年のみは其間に交つて大木の如く起立して居つた。之を見た王の侍從は、直に其旨を王に告げ「人衆は皆王の命を奉じて金像を拜んで居るが、惟イスラエル人のアナニアス、アザリアス、ミザエルの三人のみ王の命に背きて之を敬禮せず」と。

ナブコドノゾル王は之を聞いて大に怒り、直樣三人を召し、「汝等何故吾建てし金像に拜禮せざるか、早く我望みに從うて之を敬へ、さもなくば直に火の竈の中に投げ入れて身を燒き、骨を爍くぞ」と責めた。其時三人は恐るゝ樣もなく、「我等の敬ふ所の天主は、我等を能く火の竈の中より救ひ給ふの權能あり、假令天主は此奇蹟を顯はし給はずとも、我等は決して汝の作りし金像に拜禮せず」と答へたので、王は益々怒り、力强き兵士に命じ、三人を强く縛つたまゝ炎々と燃ゆる居る大きな火の竈の中に投げ込んだのである。

省みるに傲慢の罪は最も重して萬惡の首領である。彼のルシフェルは傲慢の結果、自己を造物主に比べて永遠の罰を招き、人祖たるアダム、エワは傲慢によつて主の命に背き、人類を害して現世に於ても來世に於ても辛苦艱難を受けさせるやうにし、バビロンの王ナブコドノゾルも傲慢によつて己が作りし物を神として人々に崇め敬はさせたといふのは、是皆狂氣の沙汰で、

實に憐むべき嘆はしく、傲慢の畏るべき事は萬惡の上にある事を明かに立証したものである。

されば我等は今より以後、此傲慢の畏るべき事を能く辨へ、常々力を竭して之を忌み避くるやうにと努めねばならぬ。（未完）

五月廿四日（三世紀）

應神天皇時代

聖ロガシアノ
聖ドナシアノ　兄弟殉教

降生後二百八十八年、羅馬皇帝ヂオクレシアノの時、今の佛蘭西のナンツといふ市に家富み、名榮ゑたロガシアノ、ドナシアノといふ二人の兄弟があつた。幼き時より異教の中に育つたが、後弟のドナシアノは某信者の勸めによつて洗禮を領け、力を竭して、聖教を宣べ傳へ、數多の人々を信者に導き、當時嚴しく基督教を禁ずるの國法があつたが、然し公然天主を崇め敬うて少しも畏るゝ所なく、竟に幾もなく兄のロガシアノをも說き勸めて教理を學ばさせるやうになつた。

後總督某なる者が、皇帝の命を奉じて此ナンツ市に來たり、宗教上の事を取調べて居つた。此總督の暴虐なる性質を知つて異教人等は、彼が此市に來た日直に彼の許を訪ねて「此地に不敬の惡漢があつて、先祖より傳はりし宗教を背き棄てゝ、遠方より來たりし新しき宗教を信じ、昔時ユデア國に於て死に處せられし罪人を、天地の主として仰ぎ敬うて居る。閣下願くは此事に就て嚴しく取調べられよ。國神を蔑にする首領はドナシアノなる者にて、彼は皇帝の令旨に背きて公に國神を瀆し、人々に勸めて其邪教を弘め、兄のロガシアノも亦之に力を盡して居る云々」と告げたので、總督は直に部下に命じて二人を捕へさせた。

さてロガシアノ兄弟は相變らず東西に奔走して布教に心を注ぎ、身の危險をも顧みなかつた。此日兵士等

聖ロガシアノ。聖ドナシアノ兄弟
獄中に於ける祈禱

兩人を捕縛して總督の許に送ると、弟のドナシアノは其前に進んだ。總督は之に問うて曰ふには「聞けば汝此地の菩薩なる「ヂュピテル」の神、「アポロ」の神を祭らざるばかりでなく、絶えず之を辱かしめ罵り、尚又市民に説勸めて、一の罪人を天地の主宰者として崇め尊ばさせて居るさうであるが、其事が實際であるか否か」と。ドミシアノは直に之に答へて「眞實其通りである、予は此市の人々をして、天地萬物を造り之を司り給ふ眞の神なる天主を認め識らしめ、其獨子イエズスを、世人を救ひし恩主として敬愛させんと熱心に奔走して居る者である」と。總督は「宜し然らば汝は今日より改心して其邪教を棄てよ、左もなくば汝を死に處せん」と嚴しく言渡したが、ドナシアノは少しも懼れず「死は素より覺悟にて、唯死するよりも異教に從ふを懼る」と答へ、堅き決心を示したので　總督も返す言葉なく、大に怒つて直に聖人を監獄に入れさせた。

やがて兄のロガシアノも亦總督の前に曳出され、總督より「汝は博學多才なりと聞く、宜しく心を用いて國に仕ふべきに、何故國神に背き邪教に從ひ、以て皇帝の旨に逆ふか、汝今より改心せよ、若し心を改めなば皇帝も厚く之を賞し、國神も亦福樂を與へん」と言巧に説くのを聞いたロガシアノは、笑顔を以て「神靈なき木石の偶像は、何して能く人に福樂を施し、人を助くることが出來やうぞ、我は如何にしても之を敬ふ能はず」と答へたので、是も亦總督の怒に觸れて監獄に閉籠められた。

兄弟は再び監獄内に會うて大に喜び、共に祈禱默想して主に感謝して居つた。少頃して兄のロガシアノは弟に向ひ「我の憂ふる所は未だ洗禮を領けてないといふ事のみである」と。ドナシアノは之を聞き、聲を擧げて祈り云ふには「主耶蘇基督よ、願くは爾の僕なるロガシアノの信德を嘉し給へ、明日若し兄弟が首斬られて殉教し、主の聖寵を求め、其血を以て平生の罪を洗ふを得ば幸なり」と、未だ祈り終らざる中、ロガシアノ

の心中に非常の喜びを覺ぢて、少しの憂ひもなくなつたので、二人共益々熱心に主を讃美しつゝ、祈禱默想して最後の戰ひの準備をして居つた。

翌日總督は兄弟を法廷に喚出し、言葉を改めて再び改心するや否やを訊いたが、二聖人は毫も其決心を變へないから、總督は最後に嚴しく「若し强ひて邪教を棄てずば、重き刑罰を以て死に處せん」と云ふた、が二聖人共に口を揃へて「性命は天主が我等に賜ひし所のものにして、今ト義の爲に殉死すれば、其命を主に還へす道理なれば、主は必ず之ー永遠の賞報を與へ給はん」と答へ、倍々信仰の度を高むるやうになつた。乃で總督も詮方なく重き刑罰に命じた。兵士等命によつて直に二聖人を柱に縛り、始めに之を鞭ち、次には力を極めて甘手脚を折り挫き、次ー乃み以て其肉を割いた。二聖人は言ふべからざる此痛苦をヂッと堪へ忍び、終に鎗にて咽喉を刺貫かれ　呼吸も絶ぢ〳〵になつたが、尙も口の中にて主の聖名を誦へて居つた。が、やがて一刀の下に首斬られ、二聖人の靈魂は全時に世を去り、喜び樂みつゝ天に昇つて無窮の福樂を享くることゝなつた。

信者等は兵士に賄賂を送つて、夜窃に兄弟の死體を他に移して厚く埋葬し、後其墓の上に一の聖堂を建てたが、今日では兄弟が殉教せし場所に聖堂が建てられ、其側に此事を紀念する爲め、大きな石碑が立てられてある。遠近の人々は絶ぢず此二ヶ所の聖堂に詣つて祈禱をなし、轉達を求め、其恩寵を獲る人が數へ難き程多くある。又此市の人々は此兄弟をナンッの童子と稱して深く之を愛して居る。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

火の竈より救はれし三少年の故事（二）

さてイスラエルの三少年は、衣服を着たまゝ兵士に縛られて、常より七倍も强き火の竈の中に投げ込まれた。火焰は三人を呑んで彌が上にも燃ぢ立ち、兵士等其處を立退かんとしたが、其强き火氣に當つて焚死をした位であつた。が三少年が此竈に入れられると仝時に、彼等の守護の天使が忽ち其竈に降り來て、燃ぢ立つ焰を竈の外に拂ふたので、三聖童は火にて其縛られし繩は都合よく燃き斷たれ、其身も傷つかず、其衣も焦げず、竈の中に立つて打揃ひつゝ往來して居る。乃で刑吏等添火せんと、多くの柴に油を注ぎ、之に火を照けて其竈の中に投け入れたので、火は炎々と燃ぢ上り、凄まじき勢ひで五丈餘も高くなつたが、奇妙にも竈の中の三聖童は、聲を合せて高く天主を讃美して居つた。

王は此報知を聞いて急ぎ數多の有司等と共に此處に來て、親しく竈の側に進み、中を窺ひ見ると、思はず二三歩後へ退り、「茲に投入れし者は三人にして、皆其手足を縛り置きし者ではないか。然るに見よ、今四人の少年が縛もなく傷もなく、さも愉快氣に手を執つて竈の內を往來して居る、殊に其中の一人は普通の人でなく天使に似て居る」と獨言の如に叫んで居つたが、忽に大に感動して、我知らず竈の前に進み寄り、「至尊き神の僕なるアナニアス、アザリアス、ミザエルよ、早く出で來たれ」と。

三聖童は之を聞いて竈の中より出た。人々は皆近づき寄つて無言のまゝ見ると、いづれも身に火傷なく、衣服も焦げず、煙の匂ひ火の香りさへもして居らぬので、ナブコドノゾルも益々此奇蹟に驚嘆いて、「天使を遣はして其僕を救ひ給へる汝等の神は讃美せられよ」と天主を祝し、此神の他に斯の如く人を守護するの神か無いから此三人の敬ひ拜する神を罵辱る者があれば我之を死刑に處し、其家を滅ぼさんと人に告げ知らせた。

其後此三人の聖童は位を進められて高き官位に陞り、王は改めて全國に令旨を下し「至尊き天主は、奇蹟を顯して親しく朕に見せしめ給ふ、故に我之を天

下に告ぐ、天主の權能は比ぶるものなく、其榮光は窮りなかるべし」と。

省みるに實に此王の言葉の如く、天下に時めく帝王の權も、之を天主の權に較ぶれば有つて無きが如く、天主が一たび命を下せば、悉く天下の帝王をも能く滅ぼすことが出來るのである。されば我等今より後、天主の顯はし給ひし奇蹟の事を、絶えず心に留めて益々之に依靠るやうにし、天主が一度命せらるゝ事は世の帝王が如何に力を合せても、到底之に反抗することが出來ない事を覺り、一層之を愛し之に仕へるやうにせねばならぬ。(完)

五月廿五日（降生後一〇七三年即位　一〇八五年死）

白河天皇時代

聖グレゴリオ第七世教皇

降生後千二十餘年、我後一條天皇時代、伊太利國トスカナ州に貧しき大工があつた。其小兒の名をイルデブランドと呼び、幼き時より智慧優れ才敏くあつたので、父は之を羅馬の聖母の修院に入れて教育させた。

イルデブランドは其修院に於て熱心に勉强し、早くも大才明德の人となり、二十歳の時佛蘭西の「クルニー」といふ名高き修院に入つて、終に副院長とまで推され、十數年の後其才德が益々輝き、教皇の命を奉じて羅馬に回り、樞機官となつて聖ポーロ修院を管治ることゝなつた。

當時公教會の財産は豐饒で、各地の信者等爭うて許多の土地山林を聖堂や修道院に寄附して居つた。又各國の君王も教會の內事に立入り、絶えず己が寵愛の臣に公教會の田地の收穫を與へて之を食祿として居つた乃で時々國王に媚び諛ひ、或は金銀を献上して以て己が子弟を某所の司教とか修院長とかに陞さん事を希ひ年若き者等の中にも司教に賄賂を贈つて品級の祕蹟を領け、自分の好む地の靈父となるやうな弊害が起つて來たのである。主耶蘇が福音書に於て使徒に訓へられた聖句の中にも（〇ノ八一）『汝等價無しに受けたれば價無しに與へよ』と、此聖言に憑つても此等の事は天主の聖意に背く事で、公教會に於ても代々嚴しく之を禁じ、犯す者を處罰して居つたのであるから、時の教皇は此弊害を正さんと思召され、各地の司教を佛蘭西のリオンに集め、イルデブランドを會長として此事を協議させた。

イルデブランドは使命を奉じて佛蘭西のリオンに赴いたが、此地に滯在中此市の司教は、昔日金銀を出して其職に陞つた者であるといふ事を聞いたので、即時其司教に使を遣はして、事の實否を申出るやうにと傳へさせた。司教は之を聞いて大に駭き、此事情を知つて居る者に多額の金錢を贈つて其口止めをなし置き、其翌日會議に列席した。そして「自分の斯く疑はれるのは多分何人かの讒言であらう。何卒事情を知つて居る者を証人として取調べて貰ひたい」と云ひ、他の人人は之に就て一言も出さなかつた。然しイルデブランドは主の施恩を蒙つて、人の心の祕密を曉り奇蹟をも顯して居られたので、此時威儀を正して其司教に向ひ、「御身が昔日金錢を出して聖靈の恩を購ふたといふ事を或者より知らせがあつたから、今茲で其實否を査べん。先づ御身は聖靈が聖父と聖子と仝一體にして、之を分つ能はざる事を信ずるか」と、司教は確に之を信ずる旨を答へると、聖人は「然らば御身は主を讃美して、聖父と聖子と聖靈に榮光あらん事をと誦へられよ」と云ふと、其司教は聲を擧げて、「聖父と聖子に榮光あれ」と誦へ、聖靈にと言はんと努めたが、如何しても之を言ふ事が出來ず、再三再四繰返すも矢張聖父と聖子に榮光あれと云ふのみであつたから、懼と愧かしさに打震ひつゝ其處に跪き、數多の司教の前で其罪惡を自白した。乃で司教等は協議の結果此司教の職を貶し、尙數ヶ條の規定を作り、之を各地の司祭信者に普く告げ知らせて一段落をつけた。

イルデブランドは斯くて會議を了つて後羅馬に歸り

續いて毎年教皇の使節として諸國に赴き、或は教皇を輔けて聖會内外の事務を治めて居つたが、降生後千七十三年に教皇アレキサンドル第二世が崩御せられたので、樞機官等に推されて教皇の位を繼ぐことゝなり、グレゴリオ第七世として即位せられた。

時に歐羅巴の各國は一の分裂もなくして正道に從ひ各國の君王は絶ねず人を教皇の許に遣はして、安否を尋ね道を問うて居つた。それで當時の教皇は最も有力な權勢を握り、社會最高の權利を有ち、列國君民の總ての父となつて善を勸め惡を責め、强國の皇帝と雖も亦教皇の親裁に服從せねばならなかつたのである。某年ボロニア國王が暴行して、故なく聖スタニスラオ司教を虐殺したので、教皇は之を破門し、國中の士民等に之と通ずることを禁じやうとしたので、流石の國王も如何ともすることが出來ず、總に位を避けて身を修院に藏くし、罪を償ひ、世を去つた事もある（五月七日）。また年若き佛蘭西王も、色を好み政事に荒み民を害して居つたが、教皇は司教をして宮廷に入らしめ、王に改心を勸めて終に罪を棄てゝ善に進むやうにさせたのである。

此時獨逸國王ヘンリコ第四世は、教規を蔑ろにして妄に學無く德なき人を司教に陞し、或は聖會の聖職者の地位を賣る等、種々無理の行爲を擅にし、國内の公教會を大に亂して居つた。乃で教皇は各地の司教を羅馬に召集して教議會を開き、「縱令國王と雖も人を推して司教とか或は修院長とかの聖職に陞らしてはならぬ。若し國王に推されて司教となり修院長たるも、其人菅に權利なきのみならず、教會より破門せられ聖事に與る事が出來ぬ。又之を推して位に陞せし國王大名等も仝じ罰に處すべき旨を決議して、之を各國に公布した。所が獨逸國王は之を聞いて大に怒り、無賴の徒を羅馬に遣り、教皇の隙に乘じて窃に之を刺殺させんとした。刺客は命を受け、羅馬に行き、教皇の身邊を窺うて居つたが、衛兵の爲に妨げられて兇行を遂ぐる

皇教世七第オリゲヤレグ聖

（獨逸皇帝ヘンリー第四世カノッサに於て教皇グレゴリー第七世の足下に跪く）

ことが出來なかつた。教皇は特使を獨逸に遣はし、國王に赦罪を勸めたが、國王は之を聽かざるのみならず、益々怒つて不正の司教數人と協議し、現教皇に反對の態度を執つて別に一人の教皇を選び、之を人民に告げ知らせた。グレゴリオ教皇は此悖逆不德の行動を聞き、即時獨逸國王を教會より破門した。

獨逸國王をして斯かる手段を執らせし司教中、其首謀者はウトレク市の司教であつた。此年國王は御復活の祝日に當つて此市を通られたので、特に駕を枉げて聖堂に入り彌撒に與つて、彼の司教は國王を始め文武官の前で說教し國王に媚び諛うて教皇を甚く誹り、グレゴリオが公教を統治するの權利無しとまで叫んだ。そして彌撒が畢つて自分の室に歸ると、急に腹痛が起り、終に重き病氣となつて病褥に就き、醫藥も其効なく朝夕嘆き苦しむやうになつた。

一日彼は其附添の者に向つて云ふには「我は國王に從ひ正道を離れて教皇に反抗したが、グレゴリオ教皇の聖德あるを能く知りながら、之を蹂り之を嘲つた罪は、到底赦されることが出來ず、我靈魂は永遠に救はれず」と、少頃して某侍從が病床に近づくと、「我は始め汝及び國王を助けて惡事を行ひし者等、只地獄の永遠の苦罰あるのみ」と告げ、附添の者が何故左樣の事を云はるゝかと問ふと、司教は苦しき呼吸の下より、「這は預め定まつて居る罰で、今更說く必要もない、見よ我床の周圍には早や魔鬼は群を成して取圍んで居る最早我を助くる爲の祈禱は無用である」と失望し、悲しき叫びを發しながら遂に煩悶の中に絶切れ、此司教に左端した三人の司教も幾なもく非業の最後を遂げた即ち一人は馬より落ちて身を碎き、一人は河に溺れて命を落し、一人は卒倒し、三人共に痛悔するの時間がなかつたのである。

また獨逸國民は、國王ヘンリコ王の暴行を憤はつて居る所へ、教皇より破門された事を聞いて漸々と各地に正義の旗を翻へす者が多くなり、大臣等は協議して

國王に、人民が深く恨み憤ほつて居る事情を奏上させ、若し教皇は謝罪せざれば一ヶ年の内に、人民は必ず國王を廢して新王を立てんとの決心の程を通じた。ヘンリコ王は之を聞いて大に驚き、心に不滿を抱きながら外面を裝うて改心の態を示し、伊太利國のカノッサといふ地に往つて教皇に謝罪し、其赦宥を乞ふた。教皇は父が其子に說くごとく善く勸め、國王の改心の態を見て直に破門の罰を赦した。

ヘンリコ王は國に歸つて後は、心の中は益々教皇を恨み、復も前の如く暴虐の擧動多く、數年の後には自ら兵を率ゐて羅馬に攻入つて之を破つた。教皇は天使の臺と名づけられてある小山（三月十二日）に逃れて居ると、ヘンリコ王は兵を市中に進め、聖ペトロの聖堂に入つて、擅まゝにグレゴリオ教皇を廢して別に新教皇を選び、續いて日夜兵二を促して、天使の臺を攻めて居つた。所が幸にもロベルトと云ふ大名が、グレゴリオ教皇の危急を救はんと、三萬の大兵を率ゐて羅馬に入り、大に獨逸軍を攻め、終に之を擊退けた。然し羅馬の地は之が爲に大に亂れたので教皇も一先づ他に避けんと樞機官等を伴れてモヂ、カッシノ修院（三月廿一日）に住居せられ、後サレルノ市に滯在せられることゝなつた。

グレゴリオ第七世教皇は、其在位中聖會の隆盛を謀らんが爲め、且つヘンリコ王との軋轢の爲に斯くまで心力を盡して居られたが、竟に之が爲に健康を害せられ、此地に於て危篤の病勢となられた。樞機官等を始め司教等が日夜其側に侍つて療養に手を盡し、聖人も其生命が旦夕に迫つて居りながらも心の中が確かで、病褥に就きながら常の如く内外の聖務を辯して居られた。一日某樞機官は其枕邊に近づき、嘆きながら「公教會に於て最も困難多き今日、陛下の永眠せらるゝ事は實に悲嘆の限りである」と云ふた所が、教皇は之を聽かれて「我死して天國に赴かば、慈愛深き天主に願ひ、汝等の爲に恩祐を祈るべし」と遺言し、尙三人の後繼者を指定して、汝等此三人の中より選べと告げ、病いよ〳〵革まるや最後の祕蹟を傾けて後、「我は正義を愛し敗德を斥けし故を以て放逐せられ、終に此配處に永眠するなり」と仰せられ、幾もなく其靈魂を天主に御手に托された。時に降生後千八十五年であつた。

實に此のグレゴリオ第七世教皇の聖德、才學、剛勇、權變は、歷代教皇の中にも稀に優れた方であつて、其威名は今日にまでも輝いて居る。

又彼の獨逸國王ヘンリコ第四世は、四十年間も永く公教會に反對し、屢々教皇に背き、教會内部を亂して居つたが、國民の爲に憎み怨まれ、五十五歲の時不時の死を遂げたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

公教會は磐の上に在ること

マテオ聖福音書十六章十七節に、主耶蘇は使徒聖ペトロに宣はく「我汝に告ぐ、汝は磐なり、我此磐の上に我教會を建てん、斯て地獄の門是に勝たざるべし」と。

世界各國に於て戰爭を爲すには、必ず外亂と内亂との別があつて、外國と戰端を開くは畏るべき事ではあるが、内亂も亦大に危險である。公教會は乃ち吾主耶蘇の國で、地獄の惡魔が絕えず此國を讐敵として恨み、時には外兵を以て之を攻め、時には内賊を率ゐて亂を起させて居る。此外兵といふのは即ち異教の君主士民にして、常に信者を迫害し虐殺し、之を苦め滅さんと努むる者を謂ひ、内賊とは即ち奉教者たる君主官民にして、常に傲慢、邪淫の嫉妬に陷り、或は教皇司教の聖職者に服せずして之に背き、强いて我儘を貫かんとする者、或は眞の道に順はず、公教の正しき訓に信從せず、特に主に背きて邪教に入り、信者をして異端に赴かしむる者の如きを謂ふので、千八百年來、此等内外の敵が、絕えず種々の方法を用ひて我公教會を攻め滅さんと力を竭して居るが、然も一として其功を奏せず、却て益々隆盛となるのは是れ果して如何なる故であらうか。

其故は他でもない、全く全能なる天主が、此公教會を援け給ふが故である。「汝は磐なり、我此磐の上に我教會を建てん、斯て地獄の門是に勝たざるべし」と仰せられし聖言の如く、代々の教皇は此聖ペトロの位に代つて均しく吾主の恩祐を得、以て滿天下の司教司祭信者等を導いて、天國の正しき道を歩ませて居るのである。されば異教の君主が信者の信仰を妨げんとて、如何に之を苦め、其身を虐殺すとも、信者等は剛勇にして之を離れず、奉教者たる君王が己れの傲慢に任せて教皇を責め、擅に教會の内事に立入り、兵力を以て之を脅し、宮殿を破り地を奪ふとも、教皇は惟正義を以て之を禦ぎ、竟に勝を得るのである。また邪智佞辯の者が巧みに異教を說いて信者を煽て惑すとも、教皇は其都度明辯正理を以て其正邪を明かにして背教者をして教會より破門し放逐して居る。それで異端異教は漸々滅亡し行くが、公教會は隆々として旭日の昇るが如く、其道は改まらず、其規誡は變らず、萬代に亘つて其基礎の變らないといふのは、實に奇妙ではなからうか。是れ全く吾主が磐の上に建てられた教會であるといふ明かな證據で、魔鬼惡人等の到底之に勝つ事の出來ない譯である。然るに今日人々の中には、我公教會が久しからずして必ず敗滅すると說いて居る者もある、が二千年來の歷史を見ても此言の虛しき事を知るべく、既に今日以前此公教會が萬難を排し、數多の讐敵に勝利を獲ないといふ事がなかつた。今日以後縱令一層の非難攻擊に遭ふとも、公教會は決して敗らる事がないのである。

彼の獨逸國王ヘンリコ第ト世が、あらゆる手段を以て公教會を害せんとし、終に兵力を用ひたが、教皇は飽まで正義を以て之を禦ぎ、主に依靠つたので、其結果教皇は勝を得て其名を輝かし、國王は其目的を達せざるのみならず、反つて自ら死地に陷り、王に從うて義に悖りし數人の司教も、共に罰せられて美しからざる名を世に留め、其靈魂も恐らくは今地獄にあつて永遠の苦罰を受けて居るに相違ない。是れ吾主耶蘇が聖言の如く固く公教會を守護せらるゝの証據であるから人々は明かに此理を辨へ、決して傲慢に陷り、我儘を振舞うてはならぬ。

我等も亦吾主の此聖言によつて、地獄の門が公教會に勝たざるを確に信じ、公教會を迫害する者が如何に多くとも、彼等が才學があり、兵馬の權威を有つて居るとも、そは早かれ遲かれ必ず敗滅し、惟公教會のみ主の守護の下に萬代までも滅びざる事を堅く心に留め置かねばならぬ。

五月廿六日（降生後一五一五年主　一五九五年死）

後陽成天皇時代

聖フ井リッポ、ネリオ修士

聖フ井リッポ、ネリオは、降生後千五百十五年伊太利國フロレンシアに生れたのである。幼き時より善良の性質で、十八歳の時父母の命により伯父の許で貿易の見習をして居つた。此伯父の家は富み榮えて居つたが、嗣子が無いので、フ井リッポを我兒にせんとしたが、フ井リッポは再三再四、熟慮へた上、自分は豫て望んで居つた通り、如何しても此世間を避けて、身を終るまで修道せんと決心し、厚く伯父の厚意を謝し、己が意中を語つて羅馬に往つた。そして其地で哲學神學を修め、毎日粗末な食事を用ひ、粗服を纏ひ、時來れば何處に於ても眠り、醒むれば直に祈禱を爲す等、只管身を修め德を積みつゝ勉學して居つた。

二十三歳の時學業を了へたので、以來毎日晨早く聖堂に入つて彌撒に與り、次に病院に行つて病者負傷者を勞り慰め、後二三の學校に行つて學生を訓へ、課放後生徒を伴れて各所の聖堂を巡つて居つた。此時羅馬には三百餘座の聖堂があつたので、フ井リッポは學生と俱に毎日此等の各聖堂を巡つて、聖人等の遺物を尊び、祈禱默想して恩祐を願ひ、日暮れて後は市外の「カタコンブ」に行つて居つた。

此洞窟と云ふのは、羅馬市外の地中の墓穴であつて、初代公教信者が迫害の時に、祭式を行ひ死者を葬つた所である。フヰリッポは毎夜明燈を提げて此中に入り、獨り靜かに跪いて祈禱默想を爲し、古聖人の面影を偲んで精神上の養ひとなし、夜更けて後は此墓穴に眠り、晨早くまた此穴を出て市中に入り、毎日の如く前に述べし善業を行うて居つた。それで幾もなく天主より特別の恩惠を賜うて、心の中に無量の聖愛を覺ゑ、胸も裂くるばかりになつたが、奇妙にも肋骨の上に大きな傷痕が出來、それが爲總に是を支ゑることが出來るやうになり、此僞痕は身を終るまで消ゑなかつたといふ。

三十三歳の時、聖三會なるものを興して、特に遠來の貧しき旅人を扶け救ふ事に努め、三年の間毎日市中を巡つて此等哀れむべき者を尋ねて連歸り、衣食を施して厚く慰めて居つた。越へて三十六歳の時司祭となつたが、毎日彌撒を獻ぐる時には、熱誠溢るゝばかりにして涙が頰に傳はり、聖體奉舉の時なゞは全く人事を忘れ、良久脱魂して雙手を下さぬ事が度々あつた。

信者等聖人の大德を聞いて、先を爭ひ來て告解を爲し道を問ねて居つた。聖人は非常に慈悲深く、常に罪を赦すことを樂みとし、又聖寵を蒙つて人々の罪の輕く重きを善く區別するばかりでなく、まだ告げざる惡事をも明かに悟つて之を告解することを勸め、罪を聽いて後は慈愛の言を以て痛悔させ、改心させて居つたので、如何に心情硬き者も、聖人の勸めによつて心を動かして善に向はぬ者がなく、聖人は司祭となりて以來、種々の事務が多くなつたが、相變らず貧しき者を濟ひ、病める者を訪ね、晝はつとめて人々の爲に働き、夜は默想祈禱して主に事へて居つた。

魔鬼は此聖人の德行優れしを見て大に之を恨み、種種の方法を以て之を攻めた。即ち或時は恐しき形相をして聖人を駭き恐れさせ、或時は傲慢邪淫の念を以て心を亂させ、フイリッポをして片時も安らかにさせぬやうにと努めて居つた。尙又數人の靈父を敎唆して、

嫉妬とか誹謗とかを以て其功績を傷つけ阻めんとしたが聖人は總ての誘惑に堪へ、無言のまゝ其苦痛を忍び、如何なる讒言誹謗にも頓着せず、また人々の之を信ずると否とに心を費さずして、益々心を盡して以前の如く善業を行うて居つた。スルと魔鬼はまた無耻の女をして從次も聖人を誘ひ惑はさせた。一日一人の婦人が病氣を裝ひ、聖人に來つて告解を聽かんことを請ひ、人無き機に乘じて巧に聖人を捕へて罪惡を犯させんとしたが、聖人は更に之に應せず、直に其場を逃げて戸外に出たが、此より後身を終るまで心の中に邪慾の念を覺ゑぬやうになつた。

時に彼の聖フランシスコ、ザベリオが、印度及び日本に在つて布敎に從事し、數多の人々を感化して居つた時であつたので、聖フヰリッポも亦故鄉を去つて遠く海外に航り布敎せんと望み、特に某修院に入つて德高き某修士に相談した。所が其修士は數日間熱心に祈り、主の默示を蒙つて云ふには「天主の命なれば永く羅馬に留り居れ」と。

乃で聖人は御默示に從ひ、從前の如く羅馬に在つて子弟を集め、主を愛し人を愛するの道を訓へつゝ、師弟共に心を合せて善德を修めて居つたので、市中の貧窮者や罪人にして其恩惠を獲し者が益々多くなつた。

嫉み妬む者は、但に其人に服さぬばかりでなく、反つて害を加へんと欲するもので、聖人を深く嫉んで居つた或者が、密に某司敎の許に行つて「フヰリッポは性質傲慢であるから、目下深く人々に慕はれて居るのを利用し、將來必ず邪道を傳へて敎會を亂すであらう」と讒言した。司敎は輕々しく之を信じ、直に聖人を召して嚴しく責めた上、告解を聽き說敎を爲すことを禁ずると、聖人は少しも辯明をせず、厚く敎訓を謝して其命に從うて居つた。然し正義は最後の勝利で、數日の後司敎は自ら小人の爲に弄ばれた事を知つたので、卽時聖人に對して其禁を解き、厚く詫びたさうである。

斯くて聖人が六十歳になつた時、事が繁くして自分

聖フヰリツポ、ネリオ修士

のみでは處理が附かないから、數人の弟子を選んで司祭となし、告解を聽き說敎を爲すことを輔佐させ、更に曩の聖三會を興して、一層の善功を爲さんと、之を敎皇に願ひ出た。敎皇はドミニコ會の修士二人を遣はして聖人の素行を査べさせた所が、二修士は「毎日所所に滯在してフヰリツポ師弟の言行を査べて見ると、其行爲最も善く、其言最も理に適ひ居れば、此會を興すは宜し」と云ふ復命をしたので、敎皇は之を准し、尙或聖堂を其會の爲に與へて之を聖堂會と名づけ、フイリツポを其會長に任命した。

當時聖人の名聲は遠く傳はり、人々皆其賢德を讃め頌へて、來り訪ふ者多く、樞機官等も亦毎日の如くに來て其意見を聞いて居つた。聖人はまた數多の奇蹟をも行うて、他人の心の中の祕密をも明かに知り、將來の事を預言し、能く人の病難を救ひ助けて居られた。一日も信者の某がフヰリツポ靈父と偕に船に乘り、ナポリに向つて出發したが、航海中其信者が賊の爲に甲板上より突落され、將に沈まんとしたが、平素告解を聽いて貰うて居るフイリツポ靈父の事を思ひ出し、天主に向つて「何卒聖人の功によつて此危急を救ひ給へ」と熱心に祈つて居つた所が、聖人は忽ち其側に來て、恰も道路を歩行如く、其信者の手を執つて海面を歩み、無事に其危急を助けた事もあつた。また聖人は前に述べた如く彌撒を獻げた時、度々脫魂し、雙脚が地を離れて良久空中に止まる事があるが、其都度信者等其周圍を取圍んで之を看て居るので、聖人は彌撒が畢るや否や、逃ぐるが如く御部屋に入つて居られた。此等の事は市中の人々が皆能く知つて居るので、皆之を聖人と呼び、敎皇陛下も亦機會ある毎に聖人に愛情を示して居られた。そして此會の會員等聖人を父の如くに敬ひ慕ひ、其行動を倣ひ、其言葉に從ひ、皆高く大德に進んで居つた。

聖人は七十九歲の齡を重ねた時、聖堂會の會長を辭して、專ら善終の準備をして居られた。そして其年十

餘日の間重き病氣に罹り、將に死なんとしたが、聖母マリアが發現れて即時に其病氣が全快し、數ヶ月の後再び病氣に患み、最後の祕蹟を領けんとしたが、今度も亦主耶蘇が顯れて、即坐に全癒した。が其翌年數人の者に明かに告げて「我は聖體の祝日に死す」と預言して居られたが、果して此日聖人は例の如く晨日くより、非常の熱誠を以て彌撒を行ひ、終つて常の如く人人の告解を聽いて居られたが、急に胸苦しくなり、二三度血を吐かれたので、靜かに床の上に坐つて死を待ち、やがて終油の祕蹟が終ると、人々に祝福しつゝ安らかに永眠せられた。時に降生後千五百九十五年五月廿五日であつた。

死後其轉遷によつて、重病の者が治り、十四歳の兒童が復活した等の奇蹟が澤山あつた。埋葬後七年目に其墓を聖堂内に遷さんと墓を開くと、聖屍は少しも腐れ爛れてなく、美き香が鼻を撲つて居つたさうで、其後も日々奇蹟が多いので、千六百二十二年に教皇は其名を聖人の冊簿に列し、世の信者をして公に之を敬はさすやうにされたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

想默

契約の櫃とエルザレムの聖殿に就て（四）

且説イスラエル人が埃及を出て後二年目の一月一日に、聖き幕屋と結約の櫃が全く竣工つたので、天主はモイゼスとアーロンに命じて、聖堂を祝聖するの禮を行はさせた。聖人は人々に旨を傳へて齋戒沐浴させ、主の命の如くに祭禮を行ふた。時に深き雲霧が天より降つて聖き幕屋を取圍み、天主の榮光は其内に光り輝いて居つた。之より後イスラエル人は主の御示を蒙つて、雲霧の閉して居る間は、其屯營を動かさず、之が散り晴れると、聖き幕屋を叮嚀に包んで人々は之を擔ぎ、モイゼスは主を讃美して「願くは神起き給へ、その仇は悉く散り、主を憎む者は尊前より逃げ奔らん事

を」と誦へ終ると、司祭は契約の櫃を自ら擔いで先に進み、他の者は其跟に從ひつゝ行き、其上には雲の柱が立つのである。斯ういふ有樣でイスラエル人は度々曠野を、其處此處と移り歩いて居つた。

天主はイスラエル人に聖旨を傳へ給ふ時には、必ず先づ白き雲が契約の櫃の上に降るので、さうするとモイゼスは其前に跪き、靜に主の御聲を聽いて居つた。そしてモイゼスが世を去つて後は、ヨヨズエが其跡を繼いで、全じく契約の櫃の前で親旨を承はつて居つた。

一日イスラエル人がヨヨルダン河を渡らんとしたが、水嵩高くして渡ることが出來なかつた。其時ヨヨズエは主の命を奉じ、契約の櫃を擔げる司祭を先だゝて河中に進ませ、民衆の通過ざるまで其處に止まらせたが、此時奇妙にも河の流は堰かれたやうに止まり、河底の水は一時全く涸れたので、民衆は容易く河を越すことが出來たのである。

斯くてイスラエル人は數日の後、ゼリコといふ城の前まで進んだが、此城は要害堅固にして容易く攻破ることが出來なかつた。所がヨヨズエは復も天主の命を奉じて、六日の間毎日、一同が契約の櫃を先頭に、列を爲して其城の周圍を廻り、七日目には、七人の司祭は契約の櫃よりも先に立ちて喇叭を吹くと、ヨヨズエは民衆に向つて「イスラエルの民よ、今喊聲を揚げよ、天主は爾等に此城を渡し給ふ」と叫び、民衆は一齊に天地も震ふばかりに喊聲を揚げると、不思議にも城の石垣が皆潰れ苦もなく此城を攻取ることが出來た。

我等は今此默想によつて、モイゼスが祭禮を献ぐるの前には、必ず雲霧が深く聖き幕屋を閉ざし、天主の榮光は内に滿ちて居つたので、イスラエルの民も厚く之に信じ服して、我等の神は此處に在すと崇め拜して居つた。今日も亦毎日彌撒聖祭の時には、雲霧や主の榮光は明かに見ないが、然し實際に天主が祭壇の上に降臨り給ふのであるといふ事を、我等が確に之を信じて居るのである。されば我等は今より以後、聖堂

の祭壇の上に臨臨る者は、天主の榮光ではなくして、實に天主の聖子なる事を絶ねず心に留め、往古イスラエルの民が雲霧を見て崇め敬うて居つたが、我等は目に天主の聖子が聖體の中に在すのを親しく視て居るのであるから、一層の敬虔の心を以て之を拜するやうにせねばならぬ。（未完）

五月廿七日（降生後一五六六年生　一六〇六年死）

後陽成天皇時代

バーヲの聖女マリア、マグダレナ童貞

バーヲといふのは伊太利國フロレンシア市の富豪の名で、降生後千五百六十六年に此家に一人の女の兒が生れた。是が聖女マリア、マグダレナ童貞で、幼き時の名をカタリナと呼んで居つた。

此カタリナは幼き時より愛憐の情が深く、毎日自分飲食物を節して貧しき者等に施與を爲し、全じ年輩の兒女等を訓へ誨し、努めて人目を避け獨り靜かに祈禱默想することを樂みとして居つた。一日も自ら茨の冠を編むで之を頭に戴き、其儘臥床に入つて、一夜を苦痛の中に過した事もあつた。また熱心に聖體を拜領せんと望んで居つたが、年齢がゆかない爲めに許されなかつたので、母親が聖體を領くる時にはいつも其傍を離れずして偖に祈禱をして居つた。

かくて十歳の時初聖體を領くるの恩惠を得たが、此時の悦ばしさは非常で、其後聖體を領くることを無上の福樂とし、其都度涙を流して感動して居つた。そして十二歳の時將來童貞を守つて人に嫁がず、獨り天主に事へんと心に誓ひ、十五歳の時父親が某富豪の家に嫁入させんとしたのを、カタリナは父母の膝下に縋つて自分の決心の事を述べ、終に父母の心を動かしてカルメロ修道院に入ることゝなつた。

此カルメル會の童貞女の規律は甚だ嚴しく、一切外出するを禁ぜられ、常に内に在つて祈禱、默想、苦業

をなしつゝ、世の人々の罪を代り贖ふのである。そして孰れの童貞院に於ても、嚴しく內外の二つに區別され、家族親戚の者等が訪問しても、決して面のあたりに會見することが出來ず、いつも區劃の外に於て、內に居る童貞女と語るのみで、互に顏を合はす事も出來ないのである。カタリナは此嚴しき規律も難しとも覺ねず、いつも平和と愉快の精神を以て道を修め、二ケ月の後俗衣を脫いで會の制服を纏ひ、名をもマリア、マグダレナと改めた。

此年五月、聖女は大病に罹り危篤の容態に陷つたので、修院長は童貞の誓願を立てさせて大に其心を慰めんと、三位一體の祝日に其式を行ふた。式を終つて後童貞女等は聖女を病床に移すと、其顏容は異樣に光り輝き、約そ一時間ばかり眼を主の御苦像の方に注いだまゝ、全く人事を覺らずに居つた。其後續いて四十日の間、聖女は毎朝聖體を領けて後は必ず前の如く御苦像をみつめつゝ主を讃美し、其精神は恍惚として全く人事を超脫して居つたので、之を見聞する者一人として感動せざるはなかつた。

一日聖女は愛熱に燃ねて人事を覺らぬやうになつた時、主耶蘇に向つて「主よ、我婢女は何を爲し何を行ふて宜しきや」と伺ふた所が、主耶蘇は之に訓へて宣はく「汝院長の許可を得て毎日大齋を守り、只パンと清水とのみを用ひ、主日祝日には僅少の野菜を加へよ。また平生履物を用ひずして、夏冬の別なく洗足となれ。そして汝の心の中には、此等の事を全く行うて死すと觀念し、事を謀る前には必ず苦像を仰き慕うて我が默示を祈り、尙其身を土芥の如くに見做し、修院の戒律を天主の下せし聖旨の如くに守り、人を愛し己の慾を制し、毎日絕ねず自分の苦難を天主に獻け、事無き折は必ず聖堂に入つて聖體を敬ひ拜せよ」と。

聖女は院長の許可を得て後、力を竭して吾主の御敎訓を行ひ、私慾を制へ身を苦めるの外、何事も長上の意見に服し、恰も小孩が其母親に聽くが如く、許可を得れば歡び樂んで之を行ひ、之を禁めらるゝも喜びの色を表して之を止め、自己を天地に容れざるの大罪人の如くに見做し、他の童貞女等の德行を貴び重んじて其跡を踏まんとつとめて居つた。そして祈禱の後、或は天主が其求むる所のものを聽容れて下さらなかつても、猶喜びつゝ「天主の聖旨は地に行はれよ、我は何事も主の聖慮のまゝに從はん」と云うて居つた。

聖女は心の底より萬物を棄てゝ、只主のみを愛して居つたので、主も亦異常の恩愛を聖女に與へ、絕ねず其靈魂を召して、之に不思議の事を見聞きさせて居られた。一日突然重き容態に陷つたので、側の者が大に氣遣うて病室に運ぶと、聖女は兩の手に御苦像を抱き、大聲に云ふには「我は主を愛す、主を愛す、世の人々は何故主を識らず、何故主を愛せざるか」と、或時も脫魂して人事を覺ねぬやうになつたが、其時人々は其光り輝く顏を見て、此光は乃ち胸の中の愛が、火の火燄を吐くが如く外に現はれるのであるといふ事を知り、又其時哀しき聲を聞いたが之も主耶蘇と共に其苦刑を分つて居られるのであるといふ事を知つた。是等の事は超世間的のことで、全能なる天主の特恩によつて、特に其性命を保護して頂かなかつたならば、聖女は必ず其藥さ苦さの爲に早も此世を去る筈であつたのである。

また或年の聖き週間に、聖女は他の童貞女等と偕に小さき花園を散歩して居られた所が、忽ち主の御苦難の事を想ひ浮べて、魂脫け智覺を失ふた。それで童貞女等は勞りつゝ部屋に入れると、聖女は其處に跪き、恰も御苦像の如くに兩手を舒ばし、眼眸を主の聖像の方に注いだまゝ、美しく光り輝く顏で、靜かに唇を開いて「愛し奉る主よ、願くは我を爾の御傷の裡に藏し給へ」と五度も全じ言葉を繰返し、其都度猛々顏の光が輝いて居つた。また聖き木曜日に當つても脫魂して二十時間も永く人事を覺ねぬやうになり、無中にて修院內の庭園を歩み、主の御苦難を像り造つてある十字架の道を辿つて居つたが、第十一留の「耶蘇十字架に釘附ら

れ給ふ」といふ所に往くと、聖女は忽ち地に臥して雙手を舒ばし、恰も其左右の人々に手を釘付けられて居るが如くに見ゐ、やがて哀しき聲を出して心の内の苦みを示し、人々をして憐憫の心を起させ、半時間ばかり經つと、聖女は恰も吾主が釘附けられたまゝ十字架に懸らせられた如くに身を立て、小頃して大聲に、福音書にある如く「成り終れりと曰ひ、首を垂れて息絶ゐ給へり」と云ひ、其まゝ地に倒れて氣絶したのである。他の童貞女等は之を見て、實際に全く死せし者と思うて居つたが、幾もなく正氣附き、夢より醒めた如く原のマリア、マグダレナに後つた事もあつた。また其翌年の聖き土曜日には、五度も脱魂し、數時間全身に云ふべからざる苦痛を覺ゐ、見る者が互に「斯樣に疼痛が酷しいやうでは、生命も危いであらう」とまで囁いて居つた程であつた。

聖書に、吾主耶蘇は將に死なんとする前夜、獨りゲツマニの園に於て、過ぎし昔を懷ひ、明日に迫つて居る苦難を察し、將來世の人々は自分の苦難を空くせんことを思うて、死ぬるばかりに憂ひ給ひ、其處に平伏しながら天主に『我父よ、若能ふべくば此杯を我より去れかし……』と祈られ、少頃して再び『我父よ、此杯我之を飲まずして去る能はずば、思召の如く成れかし』と祈られた事を記されてある。此處に杯といふのは、酒を飯むの器ではなく、死ぬばかりに憂ひ給ふ其苦惱を指して杯に喩へられたのであつて、聖像や聖畫の中にも、主耶蘇は地に跪き、其側に天使は杯を呈して聖父の命を奉じて之を受けられよと勸めて居る所を見るが是等は皆主耶蘇の御苦難の杯を形像つてあるので、主は初めに此杯を去れよと願ひ、次に甘んじて大功業を遂げられたのである。聖人聖女等は主の此御行爲を學び倣ひ、以て其御痛苦を分ち得んと努め、主も亦其善き志を愛して、彼等に身靈の艱難を與へ、以て其苦みの杯を分ち飲ましめ給ふのである。今日祝ふ此聖女マリア、マグダレナも、幼き時より世事を避けて身も心も潔ふし、專ら主を愛し主に事へて居つた。それ故主耶蘇の苦しみの杯を嘗めて、醉へるが如くに聖愛と苦愁とが内心に燃ゐ、後愛するに隨うてます〳〵苦痛を覺ゐ、苦痛を嘗むるに隨うてます〳〵愛熱に燃やされるやうになり、心を竭して天主を讃美し、力を竭して世の人の罪惡を贖ひ、主の聖旨が地に行はれんことを祈り願ふやうになられたのである。

聖女は主の恩寵を蒙つて脱魂した際、種々の奇事を見聞せられたが、今其一二を記すと、一日既に死せし一人の修道女が十五日間煉獄に居るのを見た、其理由は彼女が生前日曜日に、些細の手仕事をした爲であることを知つた。また某日死せし修院長が天國に於て美しき場所に坐して居られるのを見た、其位は特に數多の寶石で飾られてあつたが、奇妙の聲が響いて此場所は死者の眞潔を表してある所で、其寶石の數は死者が生前神と人とに對して積みし善德を表したものである事を知られたさうである。

また聖女が行はれた所の奇蹟も數多あつて、或時は魔鬼に附かれた者を見て、一喝の下に其魔鬼を遂ひ斥け、或時は重病者を治し、或時は不治の不具者を卽座に全癒さす等、一々此處に記し盡すことが出來ないほどであつた。

聖女はまた特に主の異恩を蒙つて心身の平和を得、數年の間歡び樂みつゝ德を修めて居つた。某年聖靈降臨の祝日に默想して居つたが、例の如く脱魂して良久人事を覺ゐなかつたが、其間に聖女は一の深き坑の如きものを見た。其内には一群の醜惡極まる魔鬼が居つて、聖女に向ひ「汝は今より五年の間此坑内に居れ」と云ふので、聖女は初め大に驚き、此言葉が如何なる意味であるかと不審に思うて居つたが、後に是は天主より自分の德を錬り鍛へる爲め、五ヶ年の苦みを嘗めねばならぬといふ默示を與へられたものなることを知つたので、快よく其聖意に從はんと決心し、尙主に見離し給ふ勿れと祈つて居つた。所が其後果して魔鬼は機

樣の方法を以て攻め寄せ、聖女に少しの慰安をも與へないやうにしたので、聖女の心の中が大に亂れ初め、傲慢、邪淫、貪吝、怨恨等の惡念が盛んに起つて、一時も安き時がなく、心の苦さは譬へやうもなくなつた。が聖女は絶ねず哀しみ哭きながら「吁我は道理を辨へぬ人であらうか、全く智識なき獸類であらうか、我が心の中には一點の美しい善き事もない。此上は身を粉にし骨を碎いても惡に從うて主に罪を獲ないやうに爲ねばならぬと、其れ以來所謂苦業を重ね、失望せずして一心に惡魔と戰うて居つた。一日も聖ベテザクトに倣うて自ら荊茨の中に飛込み、傷つき血流れて居るのを見て、他の童貞女等は之を止めると、聖女は其厚意を謝しながら「此は私の罪の償ひで、愛する我主の命令であります」と答へ、誘惑が多くあるほど益々深く主に靠縋つて居つた。また別に聖母マリアに對しても熱心に依縋つて居つたが、一日聖母は御發現になり、白き布を聖女の頭の上に置きつゝ「今少時勉めよ、讐敵に勝つの日が近づけり」と仰せられた事もあつた。惡魔は聖女が誘惑の爲に種々の痛苦を受くるも、尙善き志を守つて行爲を正くして居るのを見て、倍々力を盡して內心を亂すに努め、或時には兇惡の相を顯して數時間も之を强く鞭うつた事もあつたが、聖女は飽くまでも之を耐へ忍び、益々主の恩祐を乞ひ求め、決して罪を犯さなかつたのである。

寔に天主の貴び嘉せらるゝ所は、聖人等の平和な精神ではなく、主を愛する爲の犧牲的精神と、靈魂を練り鍛ふの德行とである。バージの聖女マリア、マグダレナ童貞は、昔日心の內が平和にして潔く、其靈魂は樂みと慰安に充たされ、大に天主に寵愛せられて居つた。が聖女は續いて其心の中は、傲慢邪念の惡しき想ひに迫められて樂みもなく平安もなく、朝夕苦み蹙きつゝ惡を避け善に進み、絶ねず我身を責め、主の聲前に哭き叫び、あらゆる精神上の苦惱を嘗めつくして居られたから昔日の功德に較べて百倍以上も優るやうになり、天主より愈々深く重く寵愛するやうになつたのである。是れが乃ち靈魂上の鍛錬で、また尊ぶべき心の戰の勝利である。されば之を讀む者はよろしく此事に就て篤と默想を爲し、深く之を心の中に留め、以て己が身を修め靈魂を救ふの法とせねばならぬ。

世間の痛苦は如何に長く重くとも、月日の經つに隨うて必ず終末がある、聖女は惡魔と大なる戰を交へ、苦戰奮鬪して五年の月日を過し、漸く五度目の聖靈降臨の祝日を迎へるやうになつたので、大に歡びつゝ心の中に、五年の期日も漸く滿ちたので、吾主は必ず我を惡魔の坑內より救ひ下さるであらうと、樂みつゝ其日を待つて居つた。愈々其當日聖女は他の童貞等と偕に聖堂に於て日課を誦へて居つた所が、忽ち例の如く脫魂し、其面は全福を受けて光り輝き、高き聲にて天主の聖愛を讃め頌へ、天國の福樂を說いて居るので、童貞等は耳を傾け恍惚として之を聽いて居ると、天使が發顯れて聖女に白く潔き服を着せ、花輪とか寶石を以て其身を美しく飾つた。時に聖女は祈つて曰ふ「主よ我婢女をして此世に報いて來世に棄て給ふ勿れ」と。

斯くて聖女は四十一歲の時大病に罹り、全身に疼痛は劇しく、心の中が憂悶に充たされ、恰も吾主が十字架に釘つけられ給ふ時の如くであつた。一日靈父は「勉めて其苦痛を受け忍ばれよ、久しからずして必ず平安を得ん」と說き勸めると聖女は「罪女は平安を求めず、惟痛苦を願ひ望む」と答へて居られたが、病勢は次第に重くなつて臨終に迫つて來た乃で最後の祕蹟を領け、後童貞女等に「主耶蘇の聖名に因つて願ふ、諸孃は萬物を棄てゝ獨り心に主を愛し慕ひ、只管痛苦を嘗めて主の聖愛と光榮とを彰はされん事を」と說き、やがて笑顏をして眠るが如くに此塵の世を去られたのである。時に降生後千六百六年であつた。

市中の人々は聖女の死を聞いて續々と聖堂に入つて聖屍を看た。そして其時に行はれた奇蹟も少くなかつた。其中にも或富家の一少年で、品行正しからざる者

が此聖堂に入つて聖屍の前に立つて看て居つた所が、既に死せし聖女の頭が動いて其向きを變へたので、人人は聖女が邪淫に汚れたる此少年を見るに忍びず、之を酷く惡み厭はれたのである事を知り、該少年も亦全樣の意味を覺つたので大に愧ぢて直に聖堂を出で、其後惡を改めて善德に進むやうになつたといふ。

數日の後立涙な葬禮を行うて聖堂内に葬つた。越へて二年其墳墓を他に遷すために死體を發堀したが、少しの腐敗變色もなく、其後續いて數多の奇蹟が顯はれたので、六十三年後種々取調べた結果、敎皇は其名を聖女の冊簿に列せられたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

契約の櫃とエルザレムの聖殿とに就て（五）

却説イスラエルの民が豐饒なるユデアの地を得て後契約の櫃をシロ市に安置し、大司祭も此地に住居して、モイゼス、ヨゾエの跡を繼いで天主に事へ聖き祭禮を行うて居つた。天主も亦屢々例の如く其櫃の上より明かに聖慮を告げられ、斯くの如くにして凡そ五百五十年も經つたっそして若し隣國より戰を挑み、界を犯し地を奪ふやうな場合には、イスラエルの民は昔日モイゼスの時の如く、司祭は契約の櫃を擔いで先頭となり、兵士等之に跟從うて戰場へも赴いて居つた。

主耶蘇御降生前凡そ千百年、即ちモイゼスの五百年の後、エリといふ人が大司祭の時、イスラエルの民等規誡を守らず、司祭等も亦祭式を疎忽にして居つたので、天主は大に義怒り給ひ、預言者サムエルに默示を以て之を罰する事を告げさせ給ふた。が人々は之を信ぜなかつた。後隣國のフイリステイなる者、兵を率ゐて此ユデアの地を攻め、漸くと地を奪ひ城を陷ゐれたので、イスラエルの民等、例の如く契約の櫃を先頭に、天主の恩祐を仰ぎつゝ揚々として出陣し、フイリステイと戰を交へたが、天主の義怒は未だ解けず、イスラエルの民が力を竭して血戰しても、上主の恩祐がなく、竟に大に敗れて三萬餘人の兵士を失ひ、契約の櫃をも敵の手に奪ひ去られてしまふたので、人々は皆驚き怖れて爲す所を知らぬといふ有樣となつた。

一方フイリステイは戰勝つて大に歡び、國の神がイスラエルの名高き神に勝ちしと誇つて、契約の櫃を市中の大廟内に入れ、ダゴンと稱する大偶像の側に置いた。翌日祭司等が其廟内に入ると、ダゴンの像が契約の櫃の前に倒れ臥して居るので、大に驚き騷ぎ、直に力を合せて其像を扶け起して元の如く上座に据ゑたが其翌日にはダゴンの像の手も頭も打碎かれたまゝ仆じく契約の櫃の前に横たはり居り、尙其時より市中に於て種々の災禍が起り、或は有害の動物が群を爲して田畝を荒らし、疫病が蔓延つて多くの者が死す等の事が續いて起つた。

乃で人々は相集つて協議した上、天主の聖櫃は我國の神を害し民を惱まし一日も我儕の間に置く事が出來ないからとて、聖櫃を車に載せ、二頭の牝牛に牽かせてイスラエルの境界なるベツサメスといふ地に送た。イスラエルの民は之を見て大に喜び、直に禮を厚うして之を迎へ、多くの者は大齋を爲して其罪を天主に詫びたと云ふ。

之を想ふにフイリステイはイスラエルの民と戰うて勝利を得、契約の櫃まで奪うて歡び樂んで居つたが、後に其國の偶像が碎かれ、其國の民や土地は大なる災禍を蒙つたので、終に天主に敵することが出來ぬと知つて之をイスラエルに送り還したといふ事は、大に味ふべき事ではあるまいか。昔より今日に至るまで各所に於て背逆の惡徒等聖敎を害し、善人を苦めて居るが、是は天主が始め或は信者の德行を試み、或は其罪を罰する爲であつて、一時惡人等の横暴を准して置かれるが、然し早かれ晩かれ天主は必ず其惡人を懲らし其横暴を罰し、時には世間に於て身体に艱難を與へ、時には死後永代に互ての苦罰に處し給ふのである事が分る。

されば我等は、惡人等が善人を虐げ公敎に害を加へんとするを見ても、世の愚論に傲うて天主が人事を管せず等との妄言を爲さず、聖書の故事を默想して、此等の事は、善人の德を練り、世人の罪を罰するの爲で、天主は將來必ず其正義によつて明かに是非曲直を判斷され、惡人は必ず永罰に處せられるのであるといふ事を深く辨へて居らねばならぬ。（未完）

五月廿八日（降生後六百五年死）

推古天皇時代

カンツアリアの聖オグスチノ司敎

降生後百餘年、我京行天皇の時代の英國は、羅馬の所屬であつて、人民の中には天主を信じ敬ふ者もあり、司敎司祭もあつて布敎に從事して居つた。そして二百年後には信者等は益々多くなつたが、時の皇帝ヂオクレシアノは嚴しく公敎を禁じ、聖アルバノ（六月廿三日）を始め、數人の信者を迫害して殉敎させ、逾へて百年の後英國は羅馬の羈絆を脱して始めて獨立することゝなつたのである。

其時ペラヂユといふ公敎修道士は異端を唱へ、盛んに其邪說を弘めた爲め、英國の司敎等の間にも紛議が起り、聖敎が大に亂れるやうになつたので、佛蘭西の司敎ゼルマノ、ルプス等が敎皇の命を奉じて英國に來たり、異端を辯駁し、正邪を明かにし、人々をして據るべき所を知らしめて一層公敎を隆盛とならしめたのであつた。

其後二十年を經て獨逸のサクス人が海を航つて英國人と爭ひ、毎年兵を增して漸々と其領地を侵掠して居つた、英國人等之に勝つ事が出來ず、漸次に西北へと退き、百年の後に至つてはサクス人等全く地を奪うて數多の小國を興し、それ〳〵自ら君主を立つるやうになつたが、英國の人民は地を失ひ命を喪ひ、辛ふじて西北の一部に立籠るの止むなきに立至つたのである。

此サクス人は從來異敎に從ひ、偶像を崇拜して居つたので、彼等が英國人を殺し退けて後は、英國の公敎が自然大に衰へ、サクス人の住居する地は全く信者の影もなくなつて異敎が復も興つて來た。時の敎皇聖グレゴリオは大に憂ひ、切に其地の人々に天主を認め識らしめんと、羅馬の某修院士オグスチノに、四十人の靈父と共に英國に航り、心を協せて布敎することを命じ、全時に彩皇はサクス人の王某に宛てゝ此等の人々の事業を妨げないやうにとの親書を贈つたのである。

さて此オグスチノは生得威風凜々として背高く、才學德行も人に優れ、見る者自ら襟を正ふして之を敬ひ之に服して居つた。降生後五百九十六年、オグスチノは敎皇の親書を携へ、四十人の靈父を率ゐて羅馬を出で、北に進んでレレンス修院まで行くと、今度英國の地を奪ひしサクス人は、性來暴虐にして最も公敎を忌み嫌うて居れば、彼地に進んで布敎を爲せば必ず非業の死を遂ぐるに相違なしと告ぐる者があつたので、靈父等は之を聞いて怖ぢ恐れ、敢て前み往かうとする者がなく、オグスチノも止むを得ず此地に止まつて其事を敎皇に奏上すると、グレゴリオ敎皇は「既に善功が始まつたのであるから之を終らねばならぬ、辛苦多ければ永福も亦多し」との意味の書翰を送つて靈父等を勵まし、別に使を佛蘭西國王に遣はして、オグスチノ等四十余名が英國に航ることに就ての保護と、通譯の便を與へられん事とを請ひ、快く其承諾を得たので、一行四十余名は佛蘭西の北より船に乘つて英國のタネト島に上陸し、其處より敎皇の親書を通譯に持たせて國王に呈上し、內地に入つて布敎を爲すの許可を乞ふた。

國王エテルベルト（二廿四日）は當時未信者であつたが、數年前信者なる佛國の某皇女を迎へて、其信仰を妨げぬといふ約條の下に皇后となし、其後國王は皇后の厚き信仰と立派な德行とを見て、心の中に公敎の眞正なる事を認め、翌日之を崇め敬はんとして居つた所であつた。それ故敎皇の親書に接して大に喜び、遠來の珍

客を暫くタヂト島に滯在させ、數日の後親らタヂト島に往つてオグスチノを始め衆多の靈父に面會せられ、內地に行つて布教することを許した上尙種々の便宜を與ふ旨をも約されたので、オグスチノ等は勇み進んで首都なるカントベリーに入り、國王より賜はりし家を聖堂と爲し、部署を定めて熱心に布教傳道することとなつた。

聖人等は每日修院の規則を守つて朝夕祈禱苦業をなし、絕ゑず主に祈り願うて人々を感化するの恩祐を仰ぎ、一方には代る〴〵市中に出でゝ道を說き敎理を述べて人々に勸めて居つたので、數ヶ月の間に市中の人人は聖人等の德行に感化されて信者となる者が多く、翌年の聖靈降臨の祈日には國王が進んで洗禮を領け、其年の御降誕の祝日には文武の諸官を始め約そ數千の人々は洗禮を領くるやうになつた。そして聖オグスチノは佛蘭西に往つて司教に陞り、直に英國に歸つて來た。

國土コテルベルトは天主の特恩を蒙つて日々善德に進み、此年宮殿の一部を割いて新司教に賜はり、又市外の大寺院及び其附近一帶の土地をも一同に賜はつたので、司教は其宮殿を改築して聖堂を造り、之を英國代々の首堂となし、又寺院を改造してペトロポーロ修院と名づけたが、以後英國歷代の皇帝は皆此院に葬られてある。

斯くて聖オグスチノは、二人の靈父を羅馬に遣はして、教皇陛下に此等の事情を奏上させた。聖グレゴリオ教皇は之を聞き、大に喜んで主に感謝せられた。そして尙も聖人等に力を竭して信者を導く事を勸め、別に國王と皇后とに賀狀を呈し、聖人には益々謙遜して祈禱苦業に努め、以て英國の人民が邪敎を棄てゝ聖敎を信奉するに至りし主の恩寵を感謝するやうにと勸め屬まされ、聖人をカントベリーの大司敎に陞して、英國の公敎會を統治させた。

サクス人の爲に西北の方に追ひ退けられた英國の人民は、依然其儘で天主を崇めつゝ聖敎に從うて居つたが、何分永く他の地方と交通せないので、自然羅馬の信者とは大に異なる點が生じ、信仰箇條も亦正確でなかつた。聖オグスチノは英國の大司敎となつたので、英國を通じて正しき道を行はせ、其靈魂を救はんと努めたが、本國の人民は誠意より天主を崇め敬うて居るも、サクス人が祖先を殺し地を奪ふた惡業を深く恨んで之と通ずるを肯かず、堅く國境を守つてサクス人の信仰如何に頓着しなかつた。がオグスチノ大司敎と協議して其謬見を正さんとの意見を持つて、數人の司敎が國境の某所に於てオグスチノ大司敎と會見した。然し是非の議論ばかりで、徒に日子を費すのみであつたから、聖人は此事は人の論斷のみで決定する事が出來ないから、天主の奇蹟を求めて是非を判斷せんと云ひ、皆之を善とした。

乃で聖人は、生れながらの盲者を一人伴れて來て、司敎等に祈禱を以て之を治さん事を乞ふた。司敎等は直と熱心に祈願を籠めたが何の効驗もないので、今度は聖人が祈禱を爲して後其眼の上に十字の聖號を畫くと不思議にも、其人の眼が開ひて明かに見ゑるやうになつた。其時オグスチノ聖人は謙遜しながら「此事は自分の德が諸子の德よりも勝れて居る結果ではなく、天主は此奇蹟を顯して自分の從ひ守る所の道は正確であるといふ事を証據せられたのである」と述べたが、司敎等は之にも服せず、終に一致する事が出來なくなり、各々其地を守つて、各自信ずる道を傳へるやうになつた。聖人は深く之を遺憾としたが、勢ひ止むを得ざる事情もあるので時機の到るを待つ事とし、彼等が漸次と和睦一致して聖道を踐む樣にと祈り願うて居つた。

其後聖オグスチノ大司敎は、衆多の靈父等と俱に各地を巡遊して布敎に努め、あらゆる辛苦艱難をも辭せず、讒言され身を害さるゝも忍び、只管英國人の救靈の爲に力を竭して居られたが、降生後六百五年敎皇聖グレゴリオ陛下が崩御せられた二ヶ月の後、此英國の

大司敎たる聖人も跡を遂うて昇天せられ、以來今日に至るまで此聖オクスチノ司敎は英國に取つて大恩ある聖人として崇め尊ばれて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

契約の櫃とエルザレムの聖殿とに就て（六）

さてフィルスティは契約の櫃を還して後、五十年ほ經つた時ダビド聖王が位に即かれ、エルザレムを以て京都とした、そして其子サロモンは天主の命を奉じて一の立派な聖堂を造り、契約の櫃をシロより迎へて其聖堂内に安置することゝなつた。

開闢以來、聖祖等は熱心に天主を敬ひ認めて居つたが、まだ聖堂と稱すべきものがなく、イスラエルの中にはモイゼス聖人の作られた聖き幕屋があつたが然もそれが總て布であつて眞の聖堂ではなかつた。今サロモンが天主の命を承けて造つた聖殿は、眞の主を敬ひ拜する爲の聖殿の首めで、古き書物にも其華麗の狀が讃め頌へられてあるから、茲に特に其聖殿の大略を記して置かう。

有名なエルザレムの聖殿はサロモン一世の大事業であつて、他の國が眞の神を知らず、暗闇の中に迷うて居つた時、眞の神の光を輝かす唯一の燈臺となつたのである。聖殿は悉く檜材と石とを以て設計せられ、モリア山の上に高く建てられたのである。四方は長く高き石墻を以て取圍み、内には前庭と司祭の庭と呼ぶ二つの庭があつて、前庭の東の方には異敎人の門と稱する廣大な塔が建てられ、異敎人は之より内に入ることが出來ない。其門から石の廻廊を傳うて南の方へ行くと、イスラエルの門といふのがあつて、此處へはユデア人より外の者が入る事が出來ず、また其南の方に司祭の門といふのがあつて、此處より奥へは誰も出入することが出來ぬ。孰れの門も高く廣大な塔形の室で其美しく立派な事は、到底我日光の日暮の門も及ばない程であつた。

司祭の庭の東寄には牲を燒く大きな祭壇があり、其奥に二階建の聖堂がある。其下の堂を聖と稱し、中央には十二斤のパンを供へる黄金の卓と、乳香を炷く黄金の香壇と、五對の黄金の燭臺とが置かれてある。其二階を聖の聖なる所と稱し、其内部には例の翅を廣げたケルビンの像の贖罪所と契約の櫃とが置れてある。聖堂は孰れも黄金と大理石で飾られ、壁や戸や柱には獅子頭、天使の像、花の形などを浮彫や透彫にしてあつて、金色燦爛として目も眩むばかりの美しさである。

此聖堂の外側は二列に三階作りの家が建てられ、其處は司祭の住居である。

以上は聖殿の大略であつて、イスラエル人等は只牲を燒き、祭を献ぐる時之に與るのみで、日常は誰人も此殿に入る事が出來ずして、唯遠く外より眺め看るのみであつた。又司祭も絶えず聖なる所に於て祭禮を行ふが、聖の聖なる所には入ることが出來ず、大司祭のみ毎年一度其室に入つて居つたのみである。

斯くの如く昔日は天主の聖堂を厚く敬ひ貴び、命に從うて其誡命を堅く守つて居つたのであるが、今日我公敎會の聖堂には、祭壇上に救世主の聖體が藏められてあるのであるから、將に百倍の尊敬と敬虔とを有たねばならず、而も信者は誰人も其聖櫃の前に跪く事を許さるゝのみならず、却て之を勸めらるゝのであるから、我等は主の慈愛に感泣して、其聖旨に從ひ、謙と熱愛の心情を以て聖體訪問を怠らぬやうにせねばならぬ。（未完）

五月廿九日（七世紀）

元明天皇時代

聖ウルベルト修士

降生後六百八十年頃、佛蘭西國サルッルのブレチニーといふ邑に名家の夫婦があつて、嗣子がないので常に天主に祈つて子を賜はらんことを願うて居つた。所が其祈禱が聽容れられて玉の如な男の子が生れたので

ウルベルトと名づけ、一方ならず寵愛して居つた。

此ウルベルトは萬代までも聖人として人々に仰ぎ慕はれるやうになつた方であるから、小兒の時より萬事が人並に優れて居つた。平素ブレチニーの修院に出入して居つたが、十三歳の時或修士が聲高く聖書を朗讀して居るのを聞いて大に心を動かし、其日某修士に就て「聖書は如何なる事を人に訓へるのであるか」といふ事を尋ねた所が、其修士は「聖書は靈魂上の食物で、人を導いて貞潔を守らせ、世俗の榮華を避けさせ、身を修め、精神の平和を得させるものである」と答へた。

ウルベルトは更に靈魂上の食物といふ意味を訊くと、彼の修士は「靈魂上の食物とは、約めて言へば天主を敬ひ愛することである。誠心を以て聖書を讀めば、必ず天主を識つて之を愛し敬ふやうになり、聖書によつて生活の意義が明かとなり、路加聖福音書にある如く『人の活くるは麪餅のみに由らず、又神の凡ての言に由る（四ノ）』と云ふ事が解るのである」と答へ、續いて「人祖は罪を犯して人類を害したが、有德の信者等は主耶蘇が世を救ひ給ひし功業に倣うて源罪と自罪とを償ひ以て善き生活を爲し、永遠の福樂を得んと努めて居るのである」と說き聞かせた。スルとウルベルトは幼な心にも深く之に感動して「私は今より此修院に入り、閣下を父として事へ、天主を敬ひ愛することを務とし、聖書を以て靈魂上の糧と致したいです」と云ふと、修士は其心懸けはまことに感心ではあるが、修院内に於ては無言を守つて祈禱大齋を爲し、絕ねず柔順を守つて長上の命に服從せねばならず、財產を全く棄てゝ自ら窮苦を甘んせねばならぬと、修院内の嚴しき生活の樣を懇々と說き、御身は名高き家の獨兒にして、大切に育てられし上、年もまだ幼なければ、恐らく其聖き志を守り續けることが難しいであらうと諫め止めやうとした。然しウルベルトは「主の寵愛と恩祐を蒙るならば決して守り難いことはありますまい」と云ひ、直に人を父母の許に遣はして、自分は今より此修院に於て修道士となる旨を告げさせた。

父母は之を聞いて大に駭き、直樣修院に駈け附けて來た。母親はウルベルトに哭き縋りつゝ「汝は我家の獨子なれば、家に歸つて父の業を繼ぎ、世間に居ながら主に事へ人を救せよ」と搔口說いたスルとウルベルトは眞面目な態度で「私は母樣の言を聞き母樣の涙を見て心動かぬ事がなく、御言葉に從うて其御心情を慰めたいのは山々ではありますが、私が此修院に於て身を修めんとすることは、主の御命令であります。吾主耶蘇は御年十二の時、聖母を離れて獨り聖堂に入られ、聖母は漸くにして之を尋ね當つた時、主は聖母に向つて『何ぞ我を尋ねたるや、我は我父の事を務むべきを知らざりしか』と、今日の我身も亦斯の如くで、主は私に此院に居らん事を命じ、私をして世間の榮福に誘ひ惑はされぬやうにして下さつたのであります。私は浮雲の如く果敢なき世間の榮福よりも、窮りなき天國の福樂を望むのであります。どうか母樣私の此希望を協へて下さい。御兩親は之が爲に辛苦せらるゝも、そはホンの亘久の間で、將來は必ず天國に於て偕與に限りなき福樂を享くるのであります」と云ひ了り、其處に跪いて「主よ願はくは我父母に慰藉を與へ、我をして此修院に於て無事に修道させ給はん事を」と祈つた。父親は此始終の樣子を見て、是は幼き兒童の言行ではなく、全く天主の默示によつての事であらうから吾々卑しき者の兎角する筈のものではないと深く感じ母親に向つて「宜しく主の命に從はねばならぬ。若し此事がウルベルト一人の考へならば必ず一ケ月も經たぬ中に心變するであらう、その時家に連れ歸るも遲い事はない」と說き勸め、竟に父母とも其子を修院に留むる事を承知した。

斯くてウルベルトは修院に於て熱心に德を修め敎理を學び、常に喜びの色を顏に呈して其擧動を愼み、他の修士等を父の如くに敬ひ、苦業大齋沈默等嚴しき修院の戒律も平然として堅く守つて居つた。それで他の

修士等も大に感心し、教理を教へ、善行に導きつゝも此生成の聖童を敬ひ愛せぬ者がなかつた。

一日ウルベルトは默想中、容顏美しく異樣の姿をした人が光の中に顯はれて「我は主の使にして、汝に善き路を訓へんとて來たりし者なり、汝世を棄て此修院に於て修道を爲すは天主の聖旨にあらず、まして獨子の身を以て父母を離れ居れば必す天主の誡命を犯さん汝宣しく此院を出でて家に回り、父母と共に主に事へよ」と、其時ウルベルトの心は大に亂れ騷ぎ、一時は修院を逃れ出て家に歸り、父母に孝養を盡しながら氣樂な生涯を送らんとの念も起つたが、續いて「否此は必す惡魔の誘惑であらう」と氣が附いたので、急ぎ耳を押へ目を閉ぢて祈禱をすると、僞の天使はいつの間にか其姿をかくし、自分の心も愁ひの雲が去つて云ひしれぬ平和を得た。

ウルベルトの父母も信仰の厚き人で、可愛き一人兒が家を棄てゝ修道して居るのを見て、自分等も何か功績を樹てんと、財産を三分し、其一を修院に寄附し、其一を以て貧民を濟ひ　其餘を自分等の生活の爲にと殘した。所が此村の村長なる人が、此ウルベルト家に副子が無ければ、其財産は當然悉く自分の所得となるのであつたから、今其一部を割いて修院に寄附し、或は貧民に施與した事を聞いて大に不滿に思ひ　兵士を遣して之を妨げんとした。然しウルベルトの父は自分の財産を或は寄附し或ひは施與となすも勝手にて、他人の干渉すべき事ではないと斷然之を實行したので、村長は大に怒つて無法にも腕力に訴へても之を妨けんと、數多の兵士を率ゐて攻寄せた。所が其際奇妙にもウルベルトの姿が顯はれて其先頭に立塞がり、威めしき顏容を以て村長を叱り、無理の爭ひをなして人を殺し傷つけんとする不法を責め、早く兵を退けよと諭した。スルと村長の心事が急に變つて善心となり、再び事を起さずと誓つて立去つた。

聖ウルベルトは二十餘歲の時司祭となつた。其日十字の聖號を以て盲目の女を全治させたが、其後地方の人々は絶えず病者を伴れて靈父の治療を願ふやうになり、靈父は其都度祈禱を誦へて病者の上に十字の聖號をなし、悉く之を治して居られた。また聖人は此等の者に向つて「汝の病氣を治したのは我の所爲であると錯り想うてはならぬ。是は天主の異恩であるから、心を竭して主に恩謝せよ、さもなくば病痛が加はらん」と訓へて居られた。其中に聖人の名が遠くまで傳はり、來つて轉達を求むる者が絶えなかつた。

聖人が未だ三十歲にもならぬ中に、兩親共善き死を遂げられ、最早世間に心を惹かさるゝ事がなくなつたので、一日も早く天主の御側に行かんと望んで居られた。一日主の默示を蒙つて、自分の臨終の期が迫つて來た事を知り、大に歡び樂んで他の修士等に之を告げ知らせて居つた。スルと數日の後重き病氣に罹つた。修士等は大に心を痛め、朝夕主の尊前に祈つて聖人の全癒を願うて居つたが、聖人は却て修士等を慰め、天主に修士等の上に祝福あらん事を祈り、續いて此地方の人々が饑饉とか疫病とか水難火災の禍ひに遭はぬやうにと祈り願ひ、終油の祕蹟を領けて後安らかに永眠せられた。

地方の人々は聖人の死を聞て之を惜まぬ者がなく、男女老幼が群り來て其死體を敬ふた。また死後も數多の奇蹟が顯はれ、聖人の轉達を乞うて肉身靈魂上に恩寵を得た者が夥しい程多數にある。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

契約の櫃とエルサレムの聖殿とに就て（七）

サロモン王の造られた聖室の大建築は、七ケ年も永く掛つて漸く竣成した。

其年王は本國の人民に、エルサレムの都に上つて此新しく美しい聖殿の殿開きの式に與れよと布告れたので、人々は大に歡びつゝ四方より蜂の如く蟻の如く都

に集つて來た。

王は司祭を始めイスラエルの長老や諸族の頭を從へ嚴しい儀式を以て契約の櫃を新しき聖殿内に移した。人々は竪琴を彈じ、笛鼓を鳴らして主を讃美し、歌ひつつ舞ひつつ進んだ。そして契約の櫃が聖殿前に運ばれると、豐かに立昇る香の煙、清らかに響く樂器の音の中に、司祭達は之を受けて聖の聖なる所に納めた。スルと光り輝く雲が天より降つて聖殿内に滿ち、四周の壁や床の金色や、大理石の光に映つてその壯觀云はん方なく、司祭等も須臾らく典禮を行ふことが出來なかつた。やがて美しく着飾つたサロモン王は、恭しく祭壇の前に跪き、兩手を排いて「天地の主宰者たる全能の天主よ、今建つた所の此聖殿は、主の僕等の祈禱を聽き給はんが爲なれば、願くは此處に祈る者を憐み、其請願を聽き容れ給へ」と祈つた。續いて司祭等は人々より獻げし數多の犧牲を燒き、人々は地に平伏して主を欽崇めた。

斯くて七日の間人々は歡喜に滿たされ、祭式が終つて後各自故郷に歸つた。時は降生前千五年であつた。

此より後契約の櫃は此聖殿の聖の聖なる所に安置せられ、イスラエルの民は四百餘年の間天主に事へて居つた。が月日の經つに從うて漸々と其信仰が衰へ、國王も人民も屢々天主の命に背き、各所に種々の偶像を立てゝ之を拜禮するやうになつた。天主は彼等の末路を憐み、絶えず預言者聖人等に默示を與へてイスラエル人の改心を勸め、若し正道に歸正らずば大なる災禍に遭はんと告げ知らせたが、人々は之を聽かずして益益邪道に陷り、遂に天主の義怒に觸れて重き罰に處せられるやうになつたのである。

即ち降生前五百八十餘年、我神武天皇御崩御の年、預言者聖セレミアは主の命を奉じ、契約の櫃を聖殿内より取出して一高き山に上り、其山の深き洞穴の内に藏れて、再び世に出ないやうになつた。續いてバビロンの大軍が界を犯してイスラエルの内地に攻入り、竟にエルザレムの都を破り、聖堂の金銀寶物を奪ひ火を放ちて聖堂と城市とを焚盡くし、又君民を捕虜として本國に凱旋したのである。

途へて七十年、ペルシヤ國王シルスはバビロン全國を併呑し、天主の默示に從ふて全國に布告を出し、イスラエルの民を悉くその本國に還したので、イスラエル人は大に歡んで厚く主恩を感謝し、聖殿の跡に礎を置き、サロモンの聖殿に倣うて工を起し、六年の後其聖堂が竣成つた。曩にバビロンに奪はれし聖堂の寶物は悉く還つたが、たゞ契約の櫃のみは依然所在不明であつた。斯くしてイスラエルの民は此聖殿に於て主を敬ひつゝ五百年を過ごし降生前十三年、時のヘロデ王は復も其地に聖殿を建築したのである。

我等は之を想ふに、イスラエルの民は絶えず天主の慈仁や奇蹟を見聞きしながら、恩を忘れ、心を迷はし、戒誡を蔑にし、天主に背いて偶像を尊敬したといふのは、實に惡むべく憐むべきことで、今日の信者中にも此イスラエルの民に倣うて悖德の所爲に耽つて居る者も尠ないであらう。彼等は異教の國に育ちながら、主の御招きによつて洗禮を領け聖體を領け、將に天國の福樂を享くべき身となりしにもかゝはらず、常に私慾をほしいまゝにし、罪惡を犯して天主に背き、來世の禍福を顧みずして只管現世の虛榮虛福に心身を惱まして居るのである。まことに痛むべく嘆くべき事の極みではあるまいか？

されば、我等は今より以後常に之を默默し、往古のイスラエル人の愚を學んで自ら死地に陷らざるやう深く心懸け、朝夕主の恩を感謝し、我身の罪惡を詫び、主に依縋つて清き一生を送るやうに努めねばならぬ。

（未完）

五月三十日（降生後一二〇〇年生一二五二年死）

後嵯峨天皇時代

聖フエルヂナンド王

降生後千二百年、我土御門天皇の時代、西班牙國の中アラゴン、レオン、カスチールの二國は擧つて公教を信奉し、其餘は回々教徒が住んで居つた。

其年レオン國土はカスチール國の皇女を納れて皇后となし、太子フエルヂナンドを生んだ。此太子は幼き時より母親に從うて聖道を學び、主を愛し、後帥に就て讀書を學び武術を習うて居つた。生得仁慈にして武勇優れ、上は熱心に天主を敬ひ父母に事へ、下は民を愛し貧しきを憐んで居つた。十八歳の時父君の命を奉じて蠲逸國に赴き、其皇女を迎へて王妃とした。時にカスチール國土が崩御せられ、其嗣子がなかつたので、フエルヂナンドは母の命に從うて、其國の國土となつた。

此國王は幼き時より回々教徒を擊退けて其地を取還さんとの志を懷いて居られたので、王位に登つて後も其宿志を外に露さず窃に其準備をして居られた。先づ人民に說諭して祈禱を勵み規誡を守ることを勸め、天主が人民の善を見て之に福を降し、敵に勝たしめ給はんことを望み、嚴しく富貴の者に命じて小民を困らせぬやう、上下心を協せて互に相愛するやうにとさせて居つた。また所々に修院を造つて修士等に德行を練らつゝ國家の爲に祈らんことを請ひ、病院を建てゝ窮病者を收容し、或は之を治療させ、或は之に善終の準備を爲せて居つた。宮廷の費用を節し、國民の課稅を輕ふして國庫を滿たすに努め、只管國を利し民を益しつゝ回々教徒との戰爭の準備をして居つたのである。

そして即位の後七年、即ち二十五歳の時大兵を率ゐて回々軍を攻めた。其時聖母の像を畫きたる大旗を馬上に樹てゝ先頭となし、親ら身にも聖母の像を帶び、前日より祈禱大齋を爲して恩祐を願ひ、當日は陣頭に

聖フエルヂナンド王

起つて三軍を指揮し、生死を主に委ねて奮戰したので、兵士等も勇氣百倍し、終に百戰百勝の樣で城を奪ひ要所を占領して日出度凱旋した。

三十歳の時父なるレオン國王が崩御せられたので、フエルヂナンドは其跡を繼いで兩國を治ひることゝなつた。そして三十五歳の時再び大軍を以て回々軍を攻め、大に勝利を得て數多の土地を占領した。當時幼き太子も從軍し、僅に千五百の兵を以て敵の大軍に當り、終に其敵を擊退けたが、人々は皆其奇妙に驚き懼れて居つたと云ふ。

フエルヂナンド王は三十六歳の時、王妃が病氣に罹つて善き臨終を遂げたので、王は以來倍々熱心に主に事へ、善業を勵み、翌年佛蘭西の皇女を迎へて王妃とし、新王妃と共に立派な信仰を保ちつゝ國を治めて居つた。

後王は三度大擧して回々軍を攻めた。以前の如く祈禱苦業を以て天主の御保護を願ひながら出陣し、到る所勝利を得て八年の間に三十餘ケ所の城を取還したのである。其中にも昔日回々教徒の京都なりしゴルド市等は三十餘萬の人口があり、最も富裕な市であつて、市中には回々教の有名き大寺院があつた。フエルヂナンド王は直樣此寺院を聖母の聖堂に改造したが、今日に至るも尙立派に遺つて居つて、其聖堂内の大理石の柱が一萬二千もあるので有名である。又セビラ市はゴルド市よりも繁華で人口四十餘萬ある。王は此兩市を略ねれる爲に三年余の日子を費したのであるが、回々軍の總督は城を交付して後、敗兵を率ゐてアフリカに渡らんとする際、良久此市を顧みて涙を流しながら、「天主に愛せらるゝ君王でなければ、決して此城を破ることが出來ない、今斯くなるは全く天命である」と、其後總督はフエルヂナンド王に服從し、毎年アフリカより貢物を獻上して居つた。

聖フエルヂナンド王は首府に凱旋して後も傲慢の心を起さず、直樣國中に令旨を下し、戰捷の大恩を主に

感謝せしめ、同々教の寺院を悉く天主堂に改造して司教靈父に之を管理せしめた。寔に此土は明君聖王とも稱ふべく、常に謙遜を厚ふして天主に事へ、公平仁智を以て國を治め、戰に臨んでは身命を惜まずして卒伍と苦難を偕にし、能く國王たるの天職を辨へ守つて居られたので、士民は擧つて其德を頌め、王の長壽を祈つて永く國政を繼さん事を希うて居つた。

聖王は五十二歳の時重き病氣に罹られ、自ら死期の近づきしを曉つて善終の準備をして居られた。御崩御の當日告解を爲し、終つて聖體を領けんことを望まれたので、司教は聖體を捧げ、文武の諸大臣は其跟に從うて王の病室に進むと、王は力めて床より出でゝ跪きつゝ之を迎へ、侍臣に命じて粗末の繩を自分の頸に掛けさせ、雙手にて恭しく御苦像を抱きながら、人々の前にて平生の罪を戴悔した。並居る一同涙を流さゞる者がなく、誰一人面をあぐる者もなかつた。王は聖體を拜領して後王子王女を召して、主を愛し民を益することを勸め、司教靈父に祈禱を唱へ主を讃美せん事を請ひ、自ら群臣と共に之に和して居られたが、三時間の後主の聖名を誦へながら安らかに永き眠りに就かれた。時は降生後千二百五十二年五月であつた。

聖骸はセビラ大天主堂の内に葬られ、其墓前に於て數多の奇蹟が顯はれた。今も尙其墓が立派に保存され、國人は常に此聖王の轉達を求めて居る。

＊　＊　＊　＊

默想

契約の櫃とエルザレムの聖殿とに就て（八）

さて降生前十三年、ヘロデ王は新しき聖堂を造營し、五年にして完成したが、其聖堂は以前の聖堂に較べると餘程廣大美麗で、また是が主耶蘇基督が御在世當時の聖殿であるから、茲に其大畧を記すことゝした。

聖殿はサロモンの聖殿の跡に建てられ、東の方にサロモンの廻廊、南の方に本廻廊と稱する廣大なる石垣で四方を取圍み、各廻廊の四隅と中央とには高さ四丈もある大理石の柱の塔が附いて居る。そして其内部に入ると異邦人の庭と呼ぶ廣庭があり、祭典の日等はユデア人も異邦人も此庭に入り、犧牲に供へる牛や羊を連れて來、聖殿に獻ぐる金を兩替する店なども出來るのである。其中央より少しく西北に當つた所に石の欄杆で區劃つた所があるが、それをイスラエル人の庭と稱し、それより階段を登つて行くと犧牲を燔いて獻げる祭壇を築いてある場所に出る。聖所は細殿と稱する大きな部屋と聖なる所と、聖の聖なる所の三部に區分され、孰れも黃金と大理石とを以て巧に磨き上げ彫刻されてあるので、其美しさ神々しさは譬へやうもなく、聖室の中には高き說教臺の設けもあつて、此月一日に述べた聖ヽコボの殉教せられたも此臺であつたのである。

又聖室の外には司祭や聖所の有司等の住家もあり、別に其裏の方に童貞を守る者、寡婦などの住居する住宅があつて、或は聖室の掃除とか、裁縫とかに從事し、時には少女を集めて教理を教へ、主に事ふることを學ばせて居つた。彼の聖母マリアも三歳の時より此聖堂に入つて身を修め聖書を學び、十有餘年の間、朝夕祈禱默想して天主に救世主の降臨せんことを願ひ、又御主耶蘇基督も度々此聖殿に於て道を說き人々を諭されたのであつた。

當時此聖殿を參觀する者は、いづれも聖殿内外の廣大にして華麗なるに驚き、珍らしく貴き木や石を始め、金銀寶石の裝飾を見て感嘆し、天下無雙の聖堂と讃稱して居つた。其上モイゼスの契約の櫃は安置してなかつたが、然し眞の契約の櫃なる聖母マリアが聖堂内に住居せられ、天主の御子も亦此所に御足を運んで居られたのであるから、其器き事は何者の家屋にも比ぶることが出來なかつたのである。

寔に天主の愛し給ふ所のものは人の善德で、エルザレムの聖堂が如何に華麗にして無二の妙堂であつても天主の尊前に於ては、聖母マリアの聖德の尊さには及

ばないのである。されば世に於て斯かる聖堂は無くも、聖母の行はれた一の德行を失はぬやうに望まねばならぬ。我等信者たる者は能く此點について默想し、若し力を竭して規誡を守り、善事を行ふならば、天主は必ず之を悅び給うて、我等の善情を華麗な聖室よりも深く愛して下さるに相違ないのであるから、今より以後努めて惡を避け善を勵み、世間の福樂を避けて、天主の聖心を悅ばせ奉つる事にのみ力を竭さねばならぬ。

（未完）

五月三十一日（1）（第一世紀）

景行天皇時代

聖女ペトロニラ童貞

聖女ペトロニラは羅馬の人で、本名をオレリアと呼び、此月十二日祝日なる聖女ドミチラ（一〇千頁）とは親戚の間柄であつた。

使徒聖ペトロが羅馬に於て布敎して居られる時、オレリアは天主を認めて洗禮を領け、魂名をペトロニラと名づけ、童貞を守つて熱心に信仰上の務めをして居つた。後中風症を病んで半身不隨となり、哀れにも病床の人となつた。聖ペトロは常に之を訪ねて慰めて居つたが、一日も例の如く聖女の室に入らうとすると、聖女の親戚にあたるチトと云ふ信者が聖ペトロに向ひ「師は常に奇蹟を行うて無數の病者を醫治し給ふが、何故ペトロニラ童貞の病氣を癒して下さらぬのですか」と問ふた。聖ペトロは之に答へて「ペトロニラ童貞は上主の命に服し、甘んじて身體の不便と痛苦とを忍び受け、以て身体が壯健にして善を行ふ者よりも多く大いなる功績を樹てゝ居るのであるから、主が其病氣を治し給はざるも尤の次第である」といひつゝチトと俱に聖女の室に入つた。そしてペトロニラに向つて「吾は今日此室に於て食事を爲すから、和女は病牀を出で其調理を爲られよ」と告げた。聖女は不隨の身なるにも係らず、少しも疑はずして其命令に從ひ、直に病床を出ると、奇妙にも病ひ無き者の如くとなり、家人どもに炊事をなし調理をなして後、自ら給仕となつて聖人を饗應した、そして其饗應が終るとまた以前の如く身体に痛苦を覺ゑ、病床に就いたまゝ動く事も出來ないやうになつたのである。

後幾もなく其重き病氣も自ら快癒つて壯健の體となり、昔日の如く熱心に善德を行うて居つたが、異敎人の某より戀望され、是非其人の許に嫁かねばならぬやうになつた。聖女は早くより身も心も主に獻げて居るので、人に嫁ぐの望なきことを打明けて之を斷らうとしたが、然し對手は異敎人の上に權威高き人であつたから、それが爲に信者を害するやうな事があつてはと萬一を氣遣ひ、取敢へず三日の後を期して回答すべきことを約束し置き、其日より自分の死を以て此事を解決するやうにと望み、朝に夕に祈禱と苦業をして、熱心に天主に其恩寵を願うて居つた。そして三日目の朝早くより靈父を迎へて臨終の準備を爲し、聖體を領け

終つて後、病ひも無く苦みもなくして眠るが如くに此世を逝られたのである。ろの年月は詳かではない。

信者等は世々聖女の禮を以て之を敬ひ、其墳墓の上に聖堂が建てられてあつた。後第一世聖ポーロ敎皇（七百六十年）は其墳を聖ペトロの聖堂内に遷し、其墓碑に「聖女オレリア、ペトロニラ之墓」と記されてある。今日聖ペトロの聖堂内には此聖女ペトロニラの祭壇があり聖女の遺物が其處に納められてある。

五月三十一日（2）（降生後一四八年生　五四〇年死）

後奈良天皇時代

聖女アンゼラ、メリシー童貞

降生後千四百八十四年、伊太利國デセンザノにメリシーといふ一家があつて、夫婦の間に三男二女を産み、熱心に主に事へつゝ子女を大切に養ひ育てゝ居つた。毎夜夕の祈禱が終ると主人は家族等に聖人傳を讀み聽かせて居つたが、季の妹のアンゼラは之を聽くことを

特に樂み、母の側に坐つて熱心に耳を傾け、其間全く無中となり、然も之を深く心の中に刻み、力めて其德行に倣はんとして居つた。そして自分は古の聖人の如く世俗を棄て、曠野に入つて隱修する等の事は出來ないから、自分の寢室を曠野の如くに見做し、常に其戸を閉めて獨り裁縫手工を爲し、祈禱默想等をして居つた。

十歲の時不幸にも父母に死別れ、母方の親戚の家に引取らるゝことゝなつた。アンゼラは父母の早く世を去りしを痛んで日夜泣き悲み、益々世俗を輕んじて主に靠縋るやうになつた。二年の後叔母も亦急病に罹り、祕蹟を傾けすして猝かに死したので、アンゼラは大に嘆き、叔母の靈魂の爲に日々哀しみながら祈つて居つた。所が一日小さき雲が光り輝きつゝ地上に漂ひ其雲の中に一人の婦人が現はれ、續いて數位の天使が現はれたが、其狀眞に歡ばしく樂しさうであるので、アンゼラは羨まゝ氣に見て居ると、奇妙にも其婦人は已に死した叔母でアンゼラの方に向ひ淸らかな聲で「恒に爾の志を守れよ、將來必ず全じく永遠の福樂を享けん」と云ひ了り其雲と共に急に散り消へて跡方もなくなつた。アンゼラは之を見聞して大に喜び、其後一層熱心に善德を行うて居つた。

十三歲より後は每日聖體を拜領し、隱修女の生活の如く日常薄き蓆を床となし石塊を枕とし、麪麭と野菜と淸水とを飲食し、尙嚴しき苦業大齋を勵み、謙遜と貧窮の德とを習はんが爲め、每日街路に出でゝ丐食を爲しつゝ饑を充たして居つた。叔母の家は富み榮ねて居つたので。アンゼラの此奇行を悅ばず、始めのうちは彼是と責め止めて居つたが、遂に其熱心に感じて默許するやうになつた。

斯くしてアンゼラは十七八歲となり、生得の美貌は花をも欺くばかりになつたが、世間の多くの女の如く樣々の方法や苦心を以て人の眼を惑かんと努むるやうな事を爲す、却て其麗しき容貌や美しき頭髮などを人に知らせぬやうにし、惟々萬德を以て其靈魂を飾り、只主の愛をのみ求めんと力めて居つたのである。

二十二歲の時叔父に死別れてよりは、全じ年輩の婦人數人と偕に我家に於て善業を勵んで居つた。一日默想中、無數の童貞女は聖女ウルスラ童貞に從ひつゝ天に屆く梯子を登つて居るのを見た。彼等は光り輝く服を纏ひ、頭に花の冠を戴き、尙各自に一位の天使が白き服を着け、額に夜光の球を耀かせつゝ附添うて居る。やがて聖女ウルスラはアンゼラに向ひ「爾は今梯子を上りつゝある者の如き童貞の會を將來新しく立てよ」と告げたので、聖女は見聞せし事を全志の婦人等に語り、益々德功を積みつゝ童貞會を立つるの準備に取懸つた。

先づ世間の人々が罪を犯し主に離るゝは、其多くは聖道を明かに知らざるに由るのであるとて、我家を開放して市中の少女等に書物を讀ませ、敎理を說き、尙各自市中に出でゝ食物や衣服の施與を受けて之を貧しき者等に與へ、或は每日病者を見舞ひ、苦む者を慰め、衣藥飲食物を施すの外敎理を說いて眞の道を敎へ、信仰を以て之を慰めて居つたが、市中の人々等は大に感じ、アンゼラ等を稱して苦む者の母、愁ふる者の慰者と呼ぶやうになつた。

スルと彼の魔鬼は其善行を嫉み、力を竭して之を誘ひ惑はさんとした。一日も天使の姿を藉つて聖女に現はれ、頻に其德行を讃め頌へて傲慢の念を起させやうとしたが、聖女は早くも之を悟つたので魔鬼に向ひ「我は罪人なれば天使が顯はれて我に敎へ諭すやうな筈がない、汝は自ら失ひし天國の福樂の事を追想して悲みに堪へず、天主を怨み人を呪うて止まず、我等を誘惑して地獄に墮さんと努むとも、我は如何にして汝の言葉を信ぜんや」と嚴しく辯駁したので、流石の惡魔も返す言葉なく、直に其姿を消した事もあつた。

數年の後には聖女の聲望は頗る高くなり、ブレシア市の某貴族の夫妻の如きは久しく其德を慕ひ、人を遣

はして聖女を自宅に招待し、數日の間厚く歓待し、爾來毎年例の如く聖女を迎へて居つた。斯くて十年の後其夫妻は聖女を永く引止めんと歎願したので、聖女も否みがたく、良久此市に留つて以前の如く善業を行ふて居つたが、市中の人々は聖女と稱して之を敬ひ、道を聽き教訓を受ける者が多くなつた。アンゼラはまだ一度も讀書した事がないが、奇妙にも神學に通じ教理に明るく、道を說き、聖書を講ずる時等は少しの淀みもなく、難き所もなかつたのである。

五十歳の時海を航つてエルザレムの聖地に行つた。其途中病氣に罹つて兩眼とも見ゑぬやうになつたが、醫者にもかゝらず其儘聖地を巡拜し、再び船に乘つて伊太利に赴かれ其船中に於て眼病平癒の祈禱をした所が、奇妙にも全快した。一日大風が起り山の如な荒浪が襲ひ來て、見る〳〵中に他の二隻の船が沈沒したので、人々は孰れも生きたる心地なく、懼れ騷いで居つたが、聖女は人々に、「唯々天主に靠縋つて熱心に祈れ」と勸めて居つた、スルと幾もなくさしもの大風も止み、波も凪ぎて無事なるを得た。其翌年教皇陛下より大赦の布告があつたので、信者等は四方より羅馬に集り、其恩赦を領けて居つた。それで聖女も亦羅馬に往くと、教皇陛下は豫てより其德の譽れを聞いて居られたので、直に之を召して謁見せられ、羅馬の病院を管理せんことを望まれたが、聖女は本國に要用ある旨を奏上して之を辭退したので、教皇も快く之を准された。

乃で聖女は羅馬を去つてプレシアに歸つた。其時丁度ミラノの大名が聖女に面會せんとて來り、ゼルマンの大軍が不日攻寄せて來、戰亂が日々に迫つて來たので、聖女の轉達を以て、天主に我國家を保護して下さるやう願ひたしと懇願した。聖女は快んで之を承諾し、苦業大齋を行うて熱心に祈つて居られたが、幾もなく兩國とも講和が成立して無事に局を結んだ。然し聖女は其時の嚴しき苦業の結果重き病氣に罹つて臨終の樣となつたので、喜んで善き最後の準備をして居つた。

聖アンゼラ。メリシー童貞

一日倦み疲れて暫時微睡みし後、目醒めて他の人に向ひ「我は今度の病氣にてはまだ死なぬ、天主は我に幽く〳〵より天國を見せて下さつたが、察するに我はまだ其福樂を享くるに堪へないのである」と、告げたが、果して其通り、數日の後無病の人となつた。

斯くて十二人の婦人は偕に住居を仝ふしつゝ病人に服事へ、少女を敎訓し、窮苦者を慰め、天主の默示を蒙つて以來、會を立つるの望みがあつたが、然し其事の困難を想ひつゝ日一日と延して居つた。所が一日祈禱の時、忽然一位の天使が其側に現はれ、目を怒らして之を睨み、手に鞭を執つて之を苦たんとするので、聖女は大に駭き、罰を受くるの故を知らなかつたが、續いて主耶蘇が御現れになり、何故命を奉じて會を立てないか」と仰せられたので、聖女は大に恐縮し、直樣會を立つるの決心をした。

そして急ぎ新しき會の規條を作つて靈父司敎の許可を得、二十八人の志願者を其名簿に記し、之をウルスラ會と命名した。其翌日修女等はアンゼラを會長となし、取あへず修院の出來るまでアンゼラの家を會場となし各自會規を守つて德功を積み、毎月聖堂に集つて敎訓を聽き、皆アンゼラの德行に倣うて善に進まざるはなかつた。

聖女は大事業も最早其緒に就いたので、毎日主に感謝し、心靜かに臨終を待つて居つた。五年の後復も大病に罹り、世を去るべき時期の到來したことを明らかに知つたので、此會の貞女等を枕邊に集めて懇に後事を委み、堅く志を守り、謙遜苦業を勵み、世の福樂を輕んじて永福を望むべき事を說き勸め、聖體を領け、最後の祕蹟を領けて後、其潔く光榮ある靈魂を全く天主の御手に托した。時は降生後千五百四十年五月三十一日であつた。

聖屍を一ヶ月間も葬らずに居つたが、其美しき事恰も生きたる者の如く、若々しき花の如く其香が馥郁として居つた。そして聖堂内に埋葬後度々奇蹟が行はれ

て居つた。

其後此ウルスラ會は隆盛となり、各國各地に其修院が建てられ、二百年の後には此會が佛國のみにても四百餘の修院を數ふるやうになり、院内の規律は却々に嚴しく、聖德も亦輝いて居る。そして各修院の童貞女は其地方の少女を訓へて學問をさせ、善德を行はせて居る。實に聖女アンヂラの德の菓は今に至るまで朽ちず、代々の信者は之を享けて救靈の資として居るのである。

＊　＊　＊　＊　＊

默想

契約の櫃とエルザレムの聖殿とに就て（九）

日說天主の聖子が降生して救世の大功業を成就せられたが、イスラエルの民は心頑にして深く迷ひ、但之に信服せざるばかりでなく、主を惡み主を辱かしめて遂に之を死罪に處したのである。主は預め彼等の末路に就て使徒等に告げ宣はく『嗚呼此市は天主の嚴罰を蒙り、やがて敵の爲に攻め滅ぼされて、人々は塵殺にされ、聖殿は其礎も殘らぬやうになる云々』と。

主耶蘇御昇天後四十年、イスラエルの民は羅馬の管轄より免れんとして反旗を翻へした所が、羅馬國土の太子は多數の兵士を率ゐて攻寄せ、エルザレム城を取圍んで之を破つた（二三六頁參照）然し太子は豫てより此市の聖殿の故事を知り、聖物を瀆し、美麗の聖殿を毀つ事を惜み、部下の者に令して、聖堂を犯し、之に火を放ち、聖物を奪うてはならぬと嚴しく告げた。乃で兵士等も其意を覺つて皆此命に從うて居つたが、イスラエル人は城廓の如き堅固な此聖堂に據つて必死に戰ひ、却々手硬く防戰して居るので、羅馬軍の一兵卒は密に松火を用意して之を城中に投入れ、火の燃え上るに乘じて亂入し、終に老幼男女の別なく斬殺したので、イスラエル人は悉く殺傷され、忽ちにして屍の山を爲すの慘狀を呈し、其上火は炎々と猛り狂うてさしもの聖殿も烏有に歸し、エルザレムは茲に全く滅亡して了

うたのである、是れ皆天主の御旨で、此民が誡命を守らず、また救世主を死罪にせしを罰し、モイゼスの古敎が廢れて新約が之に代つた事を明らかに示し給ふたのであつた。

後二百餘年を經て羅馬皇帝かユスチノは、エルザレムの聖堂は再興の出來ないといふ事が聖書に記されてあるにも關はらず、之を信ぜずしてイスラエル人、即ちユデア人を各々本國に還して聖殿を復興させやうとしたのであるが、然し三月十八日（一八七頁）に記した通り、天主は奇蹟を以て之を阻められたのである。そして今日まで凡そ千六百餘年間、ユデア人は世界に放浪しながらも、國を興してエルザレムにサロモンの聖堂を建てんと希うて居るが、天主は尙此之を准し給はぬのである。

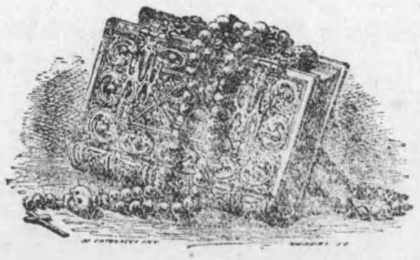
ユデアの地は現今土耳其の屬地となり、サロモン、ヘロデが建てし聖堂の跡は回々敎の大寺院となり、イスラエルの殘民は今も尙絕えず其寺院の傍にある古き石垣に靠れつゝ、喪服を纏ひ破れ衣を着て、哭きながら天主に祈つて國を興し、聖堂を建つる事を願うて居る。國を失うて千八百餘年、異敎の寺院がサロモンの聖堂の跡に建つて居るのを見ても彼等は尙悟らぬ如く舊約廢れて新約の時代に移りしをも知らないといふのは、目有つても見ず耳有つても聞かずといふ樣で、彼等の頑迷は實に憐れにも亦嘆はしい事である。

是を想ふに、エルザレムの聖殿は其結搆華麗至極なる上、吾主耶蘇は聖母マリアと偕に歩み給ひし至つて貴き所ではあるが、然しイスラエル人は救世主に從はず、新約を肯せざるにより、天主は其妙堂を毀ち、代代其地を棄てゝ主を崇むるの禮を此地に行ふことを准し給はぬのである。我等信者は數限りなき聖恩を受けながら、若し恩に感じて善を行はざれば、恐らく天主は罰を下して之を棄て給ふであらう、其時主耶蘇の御血によつて贖はれ、聖體の功德によつて養はれし我靈魂も、天主の義怒に觸れて永遠に地獄に投げ入れられ

るのである。

されば我等今より以後、常に天主の聖恩を感謝し、天主の公義を恐れ、力を竭して心を盡して死するまで主の規誡を守るは勿論、進んで主を愛し人を愛して聖心を悅ばし奉るやうに努め、以て永遠の苦罰を免がれるやうに心懸けねばならぬ。（完）

聖人物語（五月之卷）畢



大正二年九月十二日印刷
大正二年九月十五日發行

定價金參拾錢

著者　大阪市外下三番天主公教會內　シルベン、ブスケ

發行者　大阪市東區左官町五百二十四番地　ペ、マルモニエ

印刷人　仝所　杉山國司

印刷所　仝所　聖若瑟教育院活版部

複製不許

324
279

終